

温泉ドラゴン第十二回公演

THE DARK CITY

作・演出 シライケイタ

キャスト

〈現代の登場人物〉

根岸喜一郎 (87) 「えびす屋旅館」元主人
根岸優子 (47) 根岸家次女。劇作家
根岸勝 (45) 根岸家長男。末っ子。就職活動中
河村貴子 (49) 根岸家長女。主婦。浩介の妻
河村浩介 (47) 河村建設社長。貴子の夫
河村建設の社員達 (※70年前の新聞記者役の俳優達が兼ねる)

〈70年前の登場人物〉

佐竹 (42) 朝日新聞、浦和支局長
阿久津 (31) 同、浦和支局員
田丸 (28) 同、浦和支局員
郷田 (27) 同、浦和支局員
辻 (25) 同、本庄通信員
(※新聞記者の中のいずれか一人を、勝役の俳優が兼ねる)
大川 本庄町会議員 (※喜一郎役の俳優が兼ねる)
河村浩三 河村組組長。浩介の祖父 (※浩介役の俳優が兼ねる)
河村千代子 河村浩三の妻 (貴子役の俳優が兼ねる)
若き日の喜一郎 (17)

〈劇中劇の人物達〉

久保田 (※喜一郎役の俳優が兼ねる)
久保田の娘 (※貴子役、又は、優子役の俳優が兼ねる)
和子 (※貴子役の俳優が兼ねる)
美代子 (※優子役の俳優が兼ねる)
三平
金太

現代と七十年前を行き来しながら物語は進む。場所も「えびす屋」の玄関口、二階の客間、公園、大川の家、河村の家、小学校の校庭等、様々に変化する為、なるべく簡潔で観客の想像力を喚起するような装置が好ましい。

二〇一八年、夏の終わり。蝉が鳴いている。埼玉県本庄市。かつては絹産業で栄え、旧中山道沿いでも最大の宿場町であったこの町も、現在は活気を失っている。以前は親不孝通りと呼ばれた駅前の飲み屋街や銀座通りと呼ばれた商店街も、若者の流出により家業を継ぐものが無く、やむなく閉店している店ばかりで、シャッター通りと化している。そんな商店街に建つ、築百年近い木造の古い建物。かつて、地元では有名な旅館「えびす屋」として営業していたが、駅前のビジネスホテルに客を奪われ、店じまいをして十年以上が経っている。その、元「えびす屋」の玄関口が幕開きの舞台。古い旅館の玄関口らしく、広い土間と、土間から上がったやはり広い板の間。板の間の奥には、家族の生活スペースがあるが、客席からは見えない。

老人が、玄関口の土間から上がった板の間に座っている。老人の名は根岸喜一郎（八十七）。日向ぼっこをしているのか、誰かを待っているのか・・・何をすることもなく板の間に座っている。奥の部屋からはテレビのニュース聞こえている。（上演日当日のニュースなど、現代であることが分かるもの）。やがて、ガラガラと玄関の引き戸が開き、一人の女が入ってくる。旅行鞆を下げている。老人が女に気付く。目が合う二人。一切の物音が遠ざかり、ただ見つめ合う二人がそこにいる。長い沈黙が二人を包む・・・。

喜一郎
・・・
女

長い沈黙の後、静かに笑いだす、喜一郎。

喜一郎 生きていたか。
女 ……うん。
喜一郎 いつ振りだ？
女 ……お母さんのとき以来。
喜一郎 ん？（耳が遠く聞き返している）
女 （先ほどより大きな声で）お母さんのとき以来。

喜一郎 ……何年前だ。

女 ……十…五年かな。

喜一郎 ん？（やはり聞き返す）

女 （先ほどより大きな声で）十五年かな。

喜一郎 そうか…。

女 ……ごめんなさい。

喜一郎 元気か。

女 ……うん。

喜一郎 そうか。

女 お父さんも、元気そう。

喜一郎 足腰がな。

女 取り壊すんだって？ここ。

喜一郎 ああ。

女 勝が連絡くれた。

喜一郎 ……そうか。

女 残せないの？なんとか。

喜一郎 広すぎるわ、二人で住むには。

女 ……そっか。

喜一郎 ああ。

女 旅館、もう一度やれないの？人雇ったりしてさ。

喜一郎 （笑）無理だよ。客なんか来ねえよ。

女 ……そっか。

喜一郎 （奥に向かって、突如大声で）おい、勝！優子だぞ！優子が帰って来たぞ！

優子 勝いるの？

喜一郎 ああ、あれだほら、引きこもりだ、引きこもり。

勝（45）が、奥から出てくる。

勝 誰が引きこもりだよ。

優子 勝。

よお、優子姉ちゃん、久しぶり。親父、テレビまた付けっぱなし。

と言いながらテレビを消しに一度姿を消す。奥の部屋から大声で、

勝 見ないなら消しとけっていつも言ってるだろ！

喜一郎 聞いてるんだよ！

勝 (戻って来て) 嘘つけよ。つーか引きこもりじゃねえよ、就職活動中だよ。

喜一郎 この町に就職先なんかあるかよ。
勝 別にこの町とは限らねえよ。

喜一郎と勝のやりとりは、どこか親子漫才のようだ。

優子 勝。連絡ありがとね。

勝 ああ。一応生まれ育った家だからさ、取り壊す前に、見ときたいかと思っさ。

優子 ありがとう。ねえ、ここ壊してどこ住むのよ、父さん。

勝 貴子姉ちゃんとか。

優子 お姉ちゃんのか？

勝 うん、同居しないかって。

優子 ……そう。

勝 浩介さんも、是非って言うってくれて。ほら、今年から陽向(ひなた)が東京の大学行ったから、部屋が一つ空いたんだって。

優子 陽向？え？あの子、もう大学生？

勝 ああそうだよ。

優子 えー……。こないだ会った時はこんなに小っちゃかったよ？

勝 こないだっていつよ。

優子 母さんの葬式とき。

勝 何百年前の話してんだよ。

優子 で勝はどうするのよ？

勝 なにが。

優子 どこ住むのよ、勝も姉さんとかって訳にいかないでしょ？

勝 俺はどうにだってなるよ。一人なんだから。

喜一郎 はやく嫁さんもらえ。

勝 この町には若い女なんかいねえんだから。

喜一郎 若くなくたっていいだろ。婆さんならいくらでもいるだろ。

勝 なんで俺が婆さんと結婚しなきゃいけねえんだよ。

喜一郎 はっはっは。

勝 姉ちゃん、しばらくいれんの？

優子 ああ、うん。特に決めてないけど。

勝 どこ泊まんの？ここ、来週から取り壊し始まるぜ。

優子 あ、うん。適当に。あ、駅前にビジネスホテル出来たんだね。
勝 もうだいぶ前だぜ。それでここらの旅館、全滅。
優子 ……そっか。
勝 うん。
優子 お姉ちゃんは？元気？
勝 ン？ああ。もうすぐ来るよ。
優子 ここに？
勝 ああ。毎日来るから、親父の様子見に。
優子 そうなの？
勝 (小声で) 親父、大分耳遠くなっただろ？
優子 うん。
勝 足腰も弱っちゃってよ、ちよっと心配してんだよ。
優子 ……
喜一郎 こらあ！なあにコソコソ話してんだあ！
勝 (笑) なんでもねえよ。
優子 (笑) ごめんごめん。
勝 いやあ、でも驚くだろうな貴子姉ちゃん、優子姉ちゃんいたら。
優子 言っけないの？
勝 ン？ああ。
優子 ……そう。
勝 ……
勝 短い沈黙。

勝 どうなの、仕事の方は？
優子 ン？…うん。
勝 一時期よく見たよ、優子姉ちゃんの顔、新聞とか雑誌で。
優子 (笑)
勝 最近あんま出ないよね。
優子 流行りがあるからね。
勝 ふうん…。
優子 いや違うな、それだけじゃないな…。
勝 ン？
優子 流行りだけじゃないかな…。
勝 どういうこと？
優子 うん、スランプかも。

勝 お、珍しい。優子姉ちゃんが弱音。
優子 何書いていいか分からなくなっちゃってさ、最近。
勝 (笑) どうしたのよ。優子姉ちゃんらしくないぜ。
優子 (笑) だよね。

そこにガラガラと玄関が開き、貴子が入ってくる。

勝 おう貴子姉ちゃん。
貴子 (二つぶら下げた買い物袋のうち、一つを差し出し) はい、晩御飯。鯖が安かった。
勝 ああ、ありがとう。
貴子 あら、お客さん？
優子 ……。

貴子と優子の目が合う。

貴子 ……。
優子 ……久しぶり。
貴子 ……。
優子 ……。
貴子 ……何しに来たの？
優子 いや……家が無くなるって言うから。
勝が連絡したの？
勝 なん？ああ。
貴子 なんて？
勝 え？だって……

気まずい時間が流れる。

貴子 家捨てた人に、なんで連絡するのよ。
優子 別に捨ててないわよ。
貴子 捨てたようなもんでしょ。
優子 ……。
勝 まあまあ。取りあえずあがったら？こんな玄関口でさ。
貴子 ……。
勝 ほら、貴子姉ちゃん。お茶入れるから。

貴子 ……ううん。私行くわ。
勝 (引き止めて) 姉ちゃん。
貴子 父さん、あとでうちの人来るって。
喜一郎 ん？
貴子 解体の段取り話そうって。
喜一郎 ああ。
貴子 細かい日程とか、相談したいみたいよ。
勝 じゃあ、浩介さん来るまでいたらいいじゃん。
貴子 夕飯の支度しなきゃ。
勝 家で食おうよ。せっかく優子姉ちゃん来てんだから。
貴子 ……。

気まずい沈黙。

優子 ……生まれ育った家を見たいって思っちゃいけない？
貴子 ……。
優子 お姉ちゃん。家が無くなるのを、寂しいと思っちゃいけない？
貴子 ……こんな時だけじゃない。
優子 ……。
貴子 母さんが死んだとき。家が無くなるとき。あんたが家出てから帰って来たの、これだけでしょ。
優子 ……。
貴子 もう何年？家出て。三十年？
優子 ……二十八年。
貴子 二十八年。あんたが東京行って。
優子 ……。
貴子 電車で二時間の距離を、二十八年で二回。
優子 ……。
貴子 捨てたようなもんでしょ。
優子 ……。
貴子 寂しがらるだけなら、誰でも出来るでしょ。
優子 ……。
貴子 でも私たちは、生きてるの、ここで。
優子 ……。

沈黙。

勝 やめようぜ、久しぶりに会うんだから。

そこに、貴子の亭主の河村浩介（47）が入ってくる。河村建設の社長である。大らかな性格はいつも周囲を明るくする。

浩介 こんにちはー！

勝 ああ、浩介さん。

浩介 解体の日程決めないとね、そろそろ。

優子に気付く。

浩介 あ・・・お？

優子 ・・・。

浩介 お？・・・おお？

優子 ・・・。

浩介 おー！優子？おー、優子だ！

優子 久しぶり。

浩介 どしたの？何年振りよ。

優子 うん。家を取り壊しになるって聞いて。

浩介 おお、そう。いやあ、驚いた。（貴子に）知ってたの？

貴子 知らないわよ。

浩介 ああそうか。

優子 元氣そうね。

浩介 おお、優子も。

優子 陽向ちゃん、もう大学生だって？

浩介 そうだよ。あつという間だよ。東京行っちゃったよ。

優子 うん、聞いた。

浩介 面倒見てやってよ、東京で会ったら。

優子 （笑）会っても分からないわよ。こんな小っちゃい時だもん、最後に会ったの。

浩介 あ、そうか。

小さく笑いあう二人。

浩介 いやあ、でも残念だよな、「えびす屋」が無くなっちゃうってのは。

優子 うん。

浩介 ねえ、お父さん。寂しいですね。有名な旅館だったのにね。

喜一郎 ……

浩介 あれですよ。昔、ここが朝日新聞の拠点になったんですよ？

喜一郎 っ？ああ、そうだよ。

優子 あ、本庄事件。

浩介 お、そう。

勝 え、保険金殺人？

優子 違う違う。それ最近でしょ？

勝 最近だったって、もう二十年近く経ってるぜ。

優子 ううん。もつとずつと昔。

浩介 戦後すぐの事件だよな？

優子 浩ちゃん、詳しい？

浩介 ああちよつとな。

優子 ほんと？

浩介 え、なんで？

優子 いや、ちよつと調べてて。

貴子 なに？仕事で来たの？

優子 いや、そう言う訳じゃないけど。

貴子 じゃないけど、何よ。

優子 ちよつと、興味あつて。自分の生まれ育った町の出来事なもの。

浩介 まあまあ。俺はね、死んだ爺さんからよく聞いてたの。

優子 そうなの？

浩介 ああ、朝日新聞だけは許せねえって。

優子 (笑) え？なんで？

浩介 なんか大分やられたらしいんだよ、朝日に。

優子 どういうこと？

浩介 うちの爺さん、土建屋だったんだよな、河村組って。今俺が継いでるけど。

優子 うん。

浩介 土建屋つつつても、まあ、ヤクザみたいなもんだわ、当時は。

優子 うん。

浩介 ていうか、ヤクザだわ。

優子 (笑) うん。

浩介 それで、なんか朝日新聞のせいで逮捕されたとか、あいつらはとんでもない嘘つきだとか、死ぬまで言ってたよ。朝日新聞だけは許さねえって。

喜一郎 なんだ、浩介お前、河村組の孫か。

浩介 ええ、そうなんですよ、実は。

喜一郎 面白れえ因縁だな。昔は、ヤクザだらけだったよ、この辺り。

貴子 そうなの？

浩介 ああそうなんだって。そんで、うちの爺さんが関わってた、なんか闇取引を、すっぱ抜かれたんだって、朝日新聞に。

勝 ほお。

浩介 それに怒ったヤクザが、その記事書いた記者をぶん殴ったんだって。

勝 え？浩介さんの爺さんが？

浩介 いや、殴ったのは別のヤクザ、多分。

勝 ふうん。

浩介 ぶん殴られた朝日新聞が、怒ったらしいんだわ。

勝 怒った？

喜一郎 ああ。浦和支局あげて、乗り込んできたんだって、この本庄に。

貴子 え、やり返しに？

浩介 おう、そうらしいよ。

勝 マジかあ、ヤクザ相手に喧嘩かあ。

浩介 で、毎日毎日書きまくられたんだって。

勝 へー。

浩介 その時の取材本部が、ここ「えびす屋旅館」だったんですよね？お義父さん。

喜一郎 おう、二階の一番奥の部屋だよ。カツコよかったねえ。子供ながらに憧れたね。俺も新聞記者になりたいと思ったもんだ。

皆、喜一郎の言葉を聞いている。

喜一郎 皆、生きるのに必死だった。戦争終わって何にもなくなっただけで、でも「自由」になっただけで実感だけあってよ、ヤクザも、警察も、新聞屋も、それから普通の人達も、みんな、とにかくその「自由」を手放してたまらなくてよ、必死に生きてた。

喜一郎、床に両手をつき、体をゆっくりと倒していく。

勝 親父？

貴子 お父さん、どうしたの？

喜一郎、地面に耳をつける。

貴子 ちよつと、父さん。

喜一郎 こうするとな、聞こえるんだよ。

貴子 何が？

喜一郎 七十年前の、音がだよ。

貴子 何言ってるのよ。

喜一郎 この土地がよ、覚えてるんだよ。

貴子 父さん……。

皆、床に耳をつけた喜一郎を見ている。

喜一郎 本庄の大地が、覚えてるんだよ。七十年前に生きた人間達のことを。

七十年前の音が、遠くから聞こえてくる。喧騒、笑い、慟哭などがな
い交ぜになった、人々が生きている音。
音楽が入ってくる。

喜一郎 ほら、聞こえてきた。聞こえてきたぞお！

音が高まり、時を超えて現れる、新聞記者の男達！
時間は七十年前に遡っていく。

昭和二十三年、八月十五日。旅館「えびす屋」の一室。

浦和支局長の佐竹（42）、本庄通信員の辻（25）、浦和支局の郷田
（27）、田丸（28）、阿久津（31）がいる。いずれも浦和支局の
敏腕である。辻は左頬に絆創膏を貼っている。

終戦から三年。戦時中は書きたいことを書けずに抑圧されていた新聞
記者たちは、やっと手に入れた「書く自由」を謳歌している。故に、
深刻な状況でもどこか楽しげで、生き生きしていて、大らかである。

郷田 いやいやいや、どうもこうもないでしょ。やってやりましようよ、ぶっ
潰してやりましようよ、とことん。

田丸 ぶっ潰してって、郷田君、喧嘩じゃないんだからね。

郷田 田丸さん、喧嘩でしょ、こんなの。ジャーナリズムに対する宣戦布告で
しょう？ パールハーバーですよ、パールハーバー。

阿久津 郷田、その例えはどうかな？趣味悪いぞ。

田丸 今日、終戦の日なんだから。

郷田 それ関係ないでしょう。

阿久津 もう三年かあ。

郷田 いいですか？辻は記事を書いた。ペンで。どこまでも民主的、平和的行為です。

阿久津 ああそうだよ。

郷田 それに対して、相手は暴力、拳で応えた。（辻に）だろ？

辻 はい。（頬を指して）ここをね、一発。思いつきりね。

田丸 辻君、痛かった？

辻 痛いなんてもんじゃないですよ。頭ガツーンときて、火花チカチカですよ。

田丸 僕殴られたこと無いからなあ。阿久津さんあります？殴られたこと。

阿久津 （答えず）しかしまあ、君も良く殴られっぱなしで帰って来たね。

郷田 ほんとだよ。やり返せばよかったんだよ、その場で。

田丸 いやいやいや、それで良かったんだよ。僕たちの武器は拳じゃない。

郷田 新婚の田丸さんは黙っててください。

田丸 新婚は関係ないだろう、新婚は。悔しかったら結婚してみなさいよ。

郷田 いや別に悔しくないですから。

佐竹 はいはいはい、静かに静かに。

郷田 支局長、黙ってられませんかよ、こんなの。

佐竹 うん。皆、一度落ち着こう。一度整理しよう。辻君、もう一回、事の成り行きを説明してくれる。支局で聞いた話でも、現地に来ると大分感じ方が違うからね。それからにしよう、作戦立てるのは。皆も一度冷静に、冷静に。辻君。
はい。

辻、手帳を取り出す。

辻 あの、もう皆さんお気づきだと思えますが、駅からこの「えびす屋旅館」まで来る五分十分の間だけでも、チンピラやヤクザを沢山見かけたと思います。

田丸 怖かったねえ。

阿久津 ああ。異常だよ、この街は。

辻 はい。この本庄の街は、完全にヤクザに牛耳られていると言って過言ではありません。脅迫、恐喝、暴行、賭博、そしてご婦人へのいたずら行為。こういったことが日常茶飯事です。

郷田 おいおい、本当かよ。

辻 はい。この街には、大きな組が四つあります。その中で一番大きいのが河村組。表向きは土建業を営んでますが、最もたちの悪いのがこの組です。私を殴った、大川一郎という町議会議員は、この河村組の元組長です。

郷田 えー、組長？

田丸 そんなのが議員やってんの？

辻 はい、そうなんです。昭和十八年までに、徴兵令違反、賭博などで、前科三犯。終戦後に、跡目を今の河村浩三組長に譲って本庄町の町会議員選挙に立候補。当選しています。

阿久津 ほー。

辻 現在の役職は、町会副議長、司法保護委員、警民協会理事長と、とにかくこの街のあらゆる役職に就いています。

阿久津 警民協会ってなんだ？

辻 はい、警民協会というのは、警察の後援組織でして、警察に住居や備品を提供したりですね、

田丸 ちよつちよつちよつ待って、なに？住居？家？

辻 はい、家です。今年の五月にも、三棟の家屋を警察署に寄付しています。

田丸 へー。

辻 それだけではありません。警察署、簡易裁判所、検察庁、消防署等の建物ですね、建築修理費。これを全額支払っています。

田丸 えどういふこと？どっから出るの、その金。

辻 これは寄付金を募集しますね。まあ寄付金と言っても、ほとんど恐喝で集めた金ですね。警民協会は設立以降、一度も会計報告をしていません。

郷田 凄いなあ。

辻 で、この警民協会を立ち上げたのが、なんと大川本人でして、自ら理事長になっておると、こういうわけですね。まあ警察ともズブズブですわ。

田丸 ははあ。

辻 そして、この大川が跡目を譲った河村組の組長、河村浩三は、大川のことを「おじき」と呼ぶほど慕っておりまして、もうこの街における大川の存在は、表からも裏からも、盤石の態勢で支えられていると言っているでしょう。

郷田 いやあ、凄い。こりや凄いわ。

阿久津 感心してどうする。

郷田 いやあ感心するわ。倒せないんじゃないすか？これ。

田丸 諦めるの早いでしょう。

阿久津 燃えるじゃないのよ、相手が強ければ強いほど。

部屋の外から「失礼します」と声。

佐竹 はいどうぞ。

戸が開き、一人の青年がお茶を持って入ってくる。若き日の根岸喜一郎（一七）である。

喜一郎 お話し中失礼します。お茶をお持ちしました。

郷田 おー、青年、ありがとう。

田丸 偉いなあ、お母さんのお手伝い？

喜一郎 はい。あ、根岸喜一郎です。

佐竹 暫くお世話になります。よろしくね。

喜一郎 はい。あの、朝日新聞さんがいる間は貸し切りなので気を使わないでくださいって、母が。

田丸 え、貸し切り？

喜一郎 はい。

辻 それは有難いけど、なんだか申し訳ないですね。

喜一郎 いえ。母と二人なので、変な人泊めるより安心ですから。

阿久津 そうか、お母さんと二人なのか。

喜一郎 はい。父は早くに亡くなってるので。

阿久津 ・・・そうか。

田丸 君、いくつ？

喜一郎 十七です。

田丸 おー、高校生か。

喜一郎 はい。

郷田 勉強、好きか。

喜一郎 本を読むのが好きで、本庄読書会に入ってます。

郷田 本庄読書会？

喜一郎 はい。本庄の学生たちで作ってる、有志の会です。大学生が多いですが、僕みたいに高校生もいます。

郷田 何やるの？読書会って。

阿久津 読書だろう、どう考えても。

郷田 あそうか。

喜一郎 本も読みますが、本庄の未来や、日本の未来について話し合うことが多いです。

辻 偉いなあ、若いのに。

阿久津 新聞記者になるか？

喜一郎 あ、凄く興味あります。

田丸 お、じゃあ、朝日に入るか？

喜一郎 それは・・・、今回の皆さんのお仕事を拝見してから、考えたいと思っております。

阿久津 お・・・、

郷田 あ、そりやもつともだ。

皆、笑っている。

田丸 じゃあ、我々のお仕事を、じっくり観察して頂戴な。

阿久津 良かったら、いつでもおいで、この部屋に。

喜一郎 いいんですか？

阿久津 ああ、いいとも。

喜一郎 ありがとうございます！

遠くから女将の声。

女将 喜一郎！なにやってんの？邪魔しちゃだめよ！

喜一郎 はーい。じゃ僕行きます。何かあったら何でも言って下さい。

佐竹 ああ、ありがとう。

喜一郎、出て行く。

田丸 面白い青年ですね。

郷田 日本の未来は明るいか？

阿久津 どうです支局長、

佐竹 ん？

阿久津 彼、本庄の通信員に。

佐竹 ああ、いいね。辻君の次は彼かな。

辻 みつちり鍛えますよ、僕が。
佐竹 ああ頼むよ。

皆笑っている。楽しそうだ。

郷田 それより、

阿久津 ん？

郷田 ちよつといいですよね、

阿久津 何が？

郷田 この女将さん。

田丸 あ、俺も思った。色っぽい。

郷田 新婚の田丸さんは黙っててください。

田丸 新婚関係ないだろう。

阿久津 お前ら、何をしに来てるんだ？ここに。

郷田 未亡人と聞いて、尚更喜欢きになってしまっそうです。

佐竹 俺も好きだなあ、女将さん。

阿久津 支局長！

笑いあう男達。

佐竹 さてと、続きやるか。辻君。

辻 はい。事の発端はですね、約三か月前に遡ります。えーと、今年の五月、本庄駅勤務の白川という駅員がですね、自転車を止められるんですわ、駅前で巡査に。

田丸 なんで？

辻 はい、何か怪しかったんでしょね。大きな荷物を積んでたんですね、自転車の前と後ろに。

田丸 なに積んでたの？

辻 その巡査の感の鋭い事。当たり前ですわ。

田丸 だから、なにを積んでたの。

辻 大量の銘仙だったんです。

郷田 メイセン？

辻 はい。絹の織物ですね。

郷田 あー、銘仙。伊勢崎銘仙。

辻 はいそうです。それが、正規品じゃ無かった。
阿久津 聞か。

辻 はい。まあこの街で、銘仙の闇取引自体は珍しいことじゃないんですけど、その駅員に運ばせたのがですね、あ、駅員はただの使い走りだったんですけどね、その駅員に運ばせたのが、これまた本庄の町議会議員だったんです。

田丸 また議員？

辻 はい。

郷田 大川ではなく？

辻 いえ、また別の、もっと小物ですね。小林って言う。

郷田 ホントに禄でもねえな、この街は。

辻 で、警察がちよつと調べたら、この小林が半年で八回に渡り五七〇反の銘仙の闇取引を行ってたということが分かるんです。

阿久津 ほう。

辻 額にして、実に、百三十六万円も売り上げていたんです。

郷田 百三十六万？

辻 はい。七〇年後の日本では一億円以上の価値になりますね。

全員 一億円？

辻 はい。それでさすがに警察も発見してしまったからには、捜査しないわけにはいかないと。

阿久津 そらそうだ。

辻 そこで小林は起死回生の一手を打ちます。

田丸 どんな。

辻 警察のお偉方、検察のお偉方、公安、そして各新聞の本庄通信員を招いて、宴会を開くんです。そこに私も招かれました。

田丸 あー、それがあの？

辻 はい。もうあからさまな接待ですわ。飲めや歌えの大騒ぎ。女が隣に座って、こう太ももに手を置いて、すり寄ってくるんですよ。

阿久津 いいなあ、赴任早々いい思いしたなあ。

辻 ちよつと、茶化さないで下さいよ。

阿久津 冗談だよ。

辻 ハッキリ言いましたからね、銘仙の闇には目をつぶってくれと。

郷田 ほんとかよ？

辻 本庄署の太田署長なんて酔っぱらった挙句に、「本庄の記者なんてみんなグニャグニャの腰抜けだから、どうせ書けねえよ。」って言ったんですよ。警察署長がですよ。

郷田 ふうん。

佐竹 うん。それで、支局に相談に来たわけだね。

辻 はい。これは書くべきではないかと。けれど、私一人の判断ではどうしていいか分からなかったもので、支局長に相談に行きました。

佐竹 それで、この記事だね。

佐竹、八月六日の朝刊を出す。

郷田 おう、埼玉版トップ。

田丸 (見出しを読む)「検事、警察官招宴に疑惑 めいせん横流し事件取り調べ中に」

阿久津 でも、なんで宴会から二週間も経ってから？

佐竹 慎重にいったんだよ。こちらの言い分だけ載せたんじゃフェアじゃないだろう。

辻 警察、公安、町民、そして銘仙業者、それぞれの言い分を取材して、それから書きましたんで。

阿久津 なるほど。

佐竹 それと、うちだけが抜け駆けしたなんて言われないように、読売と毎日と埼玉新聞にも筋を通した。一斉に筆をとろうじゃないかってな。これは元々うちだけの特ダネではないわけだから。

郷田 でも？

田丸 他社は書かなかった。

郷田 そう。うちだけ。

阿久津 日和ったんだな、他は。

郷田 それで、大川にぶん殴られた。

辻 はい。検察庁の新庁舎のお披露目の会場で。例の警民協会主催ですよ。その席上でいきなり。大勢の前で「あの記事はなんだ」って。こうやって。

田丸 辻君、痛かった？

辻 痛いなんてもんじゃないですよ。頭ガツーンと来て、火花チカチカですよ。

郷田 これ聞いたな、さつきも。

辻 誰も止めてくれないんですよ。警察も。

阿久津 それがいつ？

辻 八月七日です。

阿久津 一週間前か。

辻 はい。

郷田 まだ治らないの？

辻 痛いんですよ、まだ。
郷田 だらしねえな、剥がせ剥がせ。

郷田、辻の絆創膏を無理やり剥がす。

辻 いたっ！

郷田 なんともなつてねえじゃねえか。

辻 痛いんですよ、まだ。

佐竹 よし分かった。うん。さてそれで、どうしようか。

郷田 どうしようかって支局長、やるしかないでしょう。報道の自由を守るための闘いでしょ。

佐竹 それはそうだよ。その為に本庄に乗り込んできたんだから。けどね、ただやればいいってもんじゃない。やるなら、二の矢三の矢を仕込んでかないと、単発では勝負にならないよ。

阿久津 ああ、息の根止めるつもりでやらんと、何度でも立ち上がってくるぞ。

辻 やりましょう。これだけ支局のエース記者が揃ってるんですから、やれますよ。

郷田 エースだってよ。

辻 あ、阿久津さんと田丸さんのことです。

郷田 お前！

皆、笑う。

辻 でも、それには町の人達の協力が不可欠です。重たい口を開いてもらわないと。

田丸 でもこれうまくやらないといけませんね。

阿久津 ん？

田丸 いや、この事件は元々、きっかけがうちの記者の被害事件だから、世論が朝日の私憤のように受け取りませんか？

郷田 ああ、確かに。

田丸 あまり強引にやっても逆効果になる気がしますね。

佐竹 私憤結構じゃないか。

阿久津 支局長。

佐竹 私憤とは一体何かってことだよ。社会の善悪に対する喜びや憎しみを、

自分自身の皮膚に感じなくて、本当の意味での正しい報道も無ければ、人間的な仕事もできない。

郷田 おー。

郷田 そういう意味じゃ、あらゆる公憤は同時に私憤にまで高まらなければ本
当じゃない。だからね、今の僕たちは、言ってみれば最高のコンディシ
ョンにあるんだよ。報道の自由を侵されたことに対する大きな怒りと、
仲間が殴られたことに対する極めて個人的な怒りが、ない交ぜになっ
てるんだからね。

郷田 うん。

佐竹 孤独な戦いになるよ。他社についてはこない。朝日単独の闘いだ。その覚
悟はあるか。

郷田 当たり前ですよ、血がたぎってますよ。

阿久津 ええ、やりましょう。

辻 ええ。

田丸 僕は女房に言われて、新しい下着を履いてきましたから。

皆、笑う。楽しそうだ。

佐竹 じゃあ、早速始めようか。まず暴力の実態を正確に把握しよう。町の人
から、暴力団から受けた具体的な被害を聞いてこられるかな。

郷田 話してくれますかね。

佐竹 粘り強くやるしかないだろう。

辻 そうですね。

佐竹 特に、大川と繋がってる河村組の犯罪行為を引き出せると良いんだがな。
狭い町です。被害者を探し出すのはそんなに難しくありません。

佐竹 単独行動は危険だ。二人一組で動いてくれ。

阿久津 よし。じゃあ、俺が辻と組もう。

郷田 じゃあ俺は新婚の田丸さん。

田丸 だから、新婚関係ないだろう。

佐竹 二時間で一旦戻ってくれ。情報をすり合わせよう。

全員 はい。

皆、出て行く。一人残る佐竹。

佐竹 ……

そこに、喜一郎が入ってくる。喜一郎に気付く佐竹。

佐竹 おう、青年。
喜一郎 すいません。階段の下で聞いてました。
佐竹 遠慮しないで、入って来ればよかったのに。
喜一郎 白熱してたので、入りそびれました。
佐竹 (笑)
喜一郎 カッコいいです、皆さん。
佐竹 (笑) 地味な仕事だよ。
喜一郎 読書会の仲間とも、よく話してるんです。この町から暴力を追放するに
はどうすればいいのか。
佐竹 ほう。
喜一郎 僕たちが立ち上がれば、大人を巻き込んで、ヤクザを追い出せるんじゃないかって。
佐竹 うん。
喜一郎 でも、学生の間でも、なかなか一枚岩にはなれません。やっぱり怖いですし。
佐竹 うん、そうだよな。
喜一郎 朝日新聞が乗り込んでくるって噂を聞いて、皆期待してます。
佐竹 (笑) そうか。
喜一郎 朝日が書きまくってくれば、僕たちも連携できるんじゃないかって。
佐竹 うん、そりゃ面白い。新聞と学生の共闘だ。
喜一郎 はい。明日、皆に話してみます。僕たちも本格的に戦わないかって。
佐竹 無理するなよ。相手は暴力団だからな。
喜一郎 なんでこの町は、こんなに暴力団が多いんでしょうか。
佐竹 うん……。一つにはね、この土地が元々持つてる気風と言うのかな、土地柄ということがあるね。
喜一郎 どういうことですか？
佐竹 ここは、江戸から明治の時代にかけて、旧中山道沿いで最大の宿場町だったのは知ってる？
喜一郎 はい。
佐竹 宿場女郎という言葉は？
喜一郎 ……
佐竹 まあ、そのまんまの意味だ。人が集まるところには金と女が集まる。
喜一郎 はい。
佐竹 金と女が集まるところには？
喜一郎 ヤクザが集まる？
佐竹 (笑) そう！簡単な理屈だ。

喜一郎 それだけの理由ですか？

佐竹 もちろんそれだけじゃないけど、それが大きな理由かな。

喜一郎 はあ……。

佐竹 大雨で利根川が溢れると、この町は水に囲まれて離れ小島になったらしいんだな。そこで旅人は何日も足止め食うわけだ。

喜一郎 はい。

佐竹 その旅人の懐を狙って、賭場が開かれる。

喜一郎 はあ。

佐竹 旅人は商売人が多いから、金は持ってる。だからどんどん巻き上げるわけだ。本庄は稼げるという噂が広まって、ヤクザがどんどん集まってくる。

喜一郎 はい。

佐竹 あつという間に、暴力の町の出来上がりだ。

喜一郎 なるほどお。

佐竹 土地って言うのは面白くなってね、そういった記憶とか匂いみたいなものは、何十年何百年経っても、ずっとそこに存在し続けるんだ。

喜一郎 ……はあ。

佐竹 住む人や、風景は変わってもね、土地の記憶はずっとそこに存在し続ける。

喜一郎 ……はあ。

喜一郎はよく分からないようだ。

佐竹 信じてないね？

喜一郎 いえ……。

佐竹 本当だよ。聞いてごらん。

喜一郎 はい？

佐竹 三百年前の、この町の記憶を、聞いてごらん。

喜一郎 ……いや。

佐竹 聞き方が分からない？

喜一郎 ……。

佐竹 特別に教えてあげよう。あいつらに内緒だぞ。

喜一郎 ……。

佐竹 僕は取材に行き詰まると、時々その土地の記憶を聞くんだよ。

佐竹、その場所に横になっていき、地面に耳をつける。

喜一郎 ……。
佐竹 こうやってね。
喜一郎 ……。
佐竹 ほら、やってごらん。

喜一郎、戸惑いながら佐竹の真似をして横になり、地面に耳をつける。

佐竹 どうだい？聞こえるかい？
喜一郎 ……よく……分かりません。
佐竹 気持ちを集中して、よく聞いてごらん。
喜一郎 はい……。
佐竹 聞こえるだろう……。
喜一郎 聞こえる……ような……聞こえない……ような……。
佐竹 目をつぶって……。
喜一郎 は、はい……。

二人は目をつぶる。

佐竹 どうだい？
喜一郎 はい……聞こえる、ような、気が……します……はい。
佐竹 そうだろう？
喜一郎 ……はい。
佐竹 我々は今……三百年前の本庄の大地と……繋がっている……。
喜一郎 ……はい。

二人は、地面に耳をつけて、本庄の記憶を聞いている。
ゆっくりと、暗転。

明かりがつかくと、時間は現代に戻っている。

夜の若泉公園。細い川沿いの遊歩道を一人歩いている優子。

夏の終わりを告げる虫の音が聞こえている。

そこに人影が現れる。浩介である。

浩介 よお。
優子 キヤッ！
浩介 優子。俺だよ。

優子 浩ちゃん？
浩介 おお。
優子 あー、ビックリしたあ。
浩介 ごめんごめん。
優子 どうしたのよ。
浩介 いや、散歩。俺の散歩コース。家、すぐそこだから。
優子 ああそっか。
浩介 優子は何やってんだよ。
優子 散歩、私も。
浩介 そっか。
優子 うん。懐かしくて。
浩介 そっか。
優子 うん。
浩介 座る？

一瞬間の間。

優子 お姉ちゃんは？
浩介 ん？ああ、家にいる。
優子 そっか。
浩介 ……
優子 ……

浩介は川沿いのベンチに座る。優子は立っている。二人の間には微妙な距離がある。

浩介 ビックリしただろ、この辺り寂れちゃって。
優子 うん。驚いた。駅前シャッター通りじゃない。
浩介 ああ。若い奴らが出て行くばかりだからな。どの店も今の代でお終い。
優子 そうなんだ。
浩介 うん。パチンコ屋も映画館も全部潰れたな。飲み屋も数件しか残ってないだろ。
優子 ……
浩介 空き地が多いの気付いた？
優子 あ、うん。
浩介 古い建物壊すばっかで新築なんか建たねえから、空き地が増える増える。

優子　　そういうことか。

浩介　　うち建築屋なのに、最近は解体ばっか。(笑) どうなるんだろうねえ、この町は。

優子　　昔は大宮とか高崎より栄えてたんだよね。

浩介　　らしいな。

優子　　信じらんないね、本庄事件みたいなことがあったなんて。

浩介　　なに、やっぱり本庄事件、書くの？

優子　　いや、まだ分かんない。

浩介　　そうか。

優子　　うん。

浩介　　最近はどうなの、仕事の方は。

優子　　うーん……。

浩介　　よく勝が新聞見せてくれたよ。姉ちゃんが載ってるぞって。

優子　　(笑) そう。

浩介　　ああ、今注目の社会派劇作家なんて書いてあったじゃん。

優子　　(笑) 社会派ね……。

浩介　　なんだよ。

優子　　スランプなんだよねえ。

浩介　　そうなの？ どうしてよ。

優子　　その社会がさ、

浩介　　ん？

優子　　現実があまりに滅茶苦茶で、物語超えちゃってるでしょ。

浩介　　んん？ どういうこと？

優子　　現実が、ドラマよりドラマチックでしょ？ 今の社会が。

浩介　　んー、そう？

優子　　あり得ないことばかり起こってる。

浩介　　そっかなあ……。

優子　　だからね、物語を書く意味っていうかね、分からなくなっちゃってね。

浩介　　ふうん……ちよつと、よく、分かんねえなあ。

優子　　(笑) そうだよね。

浩介　　あ、そうだよねって、馬鹿にしたな。

優子　　(笑) してないよ、ゴメン。

浩介　　なに、つまんなくなっちゃったってこと？ 演劇が。

優子　　……ううん、そうじゃない。

浩介　　……。

優子　　そうじゃないけど、追い付かない。

浩介 追い付かない？
優子 うん。現実に、物語が追い付かない。
浩介 ふうん。
優子 だから、一度立ち返ってみよう、って思ったのかも。
浩介 立ち返る？
優子 うん。私のルーツとしての、この町に。
浩介 難しいねえ、頭いい人の言うことは。

虫が鳴いている。

浩介 もうさ、社会派とかやめてさ、恋愛ものとか書いたら？
優子 (笑)
浩介 それの方がウケるんじゃない？
優子 恋愛ものなんて、書いたことない。
浩介 そうなの？
優子 うん。そういうシーンすら書いたこと無いかも。
浩介 マジで？
優子 うん。無いわ。「愛してます」とか書いたこと無いわ。
浩介 良いと思うけどなあ。
優子 全然興味ないわ。
浩介 興味ないの？
優子 全然ない。
浩介 えー、なんでよ？なんで興味ないのよ。
優子 えー??

優子は浩介を見ている。

浩介 なによ？
優子 ・・・・それ聞かあ。
浩介 ん？
優子 浩ちゃんが、私に、それ聞かあ。
浩介 ・・・・。

虫が鳴いている。

優子 自分でもね、ウジウジしてるなあって思うのよ。

浩介
優子
・・・。
二十八年経つても、体の深いところにね、刺さったままなの、何かが、
ずつと。

浩介
優子
あ、重たいね、私。
いや・・・。

優子
別に今更どうこうしようってことじゃないのよ。引きずってるとか、未
練があるとか、そういう事でもないのよ・・・。

浩介
優子
うん、そういう事じゃ無いのよ。
・・・。

虫が鳴いている。

優子
笑っちゃうよね。社会派劇作家とかいってき、ちよつと注目されて、新
聞なんかで取り上げられてき、

浩介
優子
・・・。
「社会とどう向き合うか」とか、「今の世の中を見つめる眼差しが」と
か書かれるんだけどさ、実際は二十八年前の、小さな小さな思い出に、
がんじがらめになる時があつてき、

浩介
優子
・・・。
すんごい勇氣出さないと、実家に帰ることすらできなくてき、
・・・。
帰ってきたら帰ってきたで、お姉ちゃんとまともに話もできなくてき、
・・・。
笑っちゃうよね。

月明かりが、優しく優子を照らしている。

浩介
貴子は、優子のことか羨ましいんだよ。

優子
そんなことないでしょ。

浩介
自由に生きてる優子がさ。

優子
自由ねえ・・・。

浩介
・・・。

優子
私は自由に生きてるように見えるのかあ。

浩介
・・・。

優子 浩ちゃんはさ、ここから出たいと思ったこと無いの？
浩介 本庄から？

優子 うん。

浩介 若い頃は思ったかなあ。

優子 そっか。

浩介 うん。それこそ、優子が東京行ったばかりの時なんか、思ったかもなあ。
あ。

優子 そっか。

浩介 よくここ来てたもんな。

優子 そうなの？

浩介 うん。ほら、ここで夜空見上げてさ、ああ、優子もこの星見てるのかなあ、なんてさ。

優子 (笑) 嘘でしょ。

浩介 ホントだよ。ロマンチストなんだよ、俺は。

優子 ゴメン。見てなかったわ。

浩介 あ、そう。

優子 東京じゃ星なんか見えないから。

浩介 ああそっか。

優子 うん。

小さく笑いあう二人。

浩介 今は、全然思わなくなったなあ。

優子 ん？

浩介 ここから出たいなんて。

優子 そっか。

浩介 ・・・うん。

二人、無言でしばし夜空を眺めている。

夜空を見上げる二人の間には、埋まりきれない距離がある・・・。

優子 私、行くね。

浩介 そう？

優子 うん。行く。

浩介 俺もうちよつと、ここいるわ。

優子 うん。

浩介 気を付けて。
優子 うん。お休み。
浩介 お休み。

優子は去って行く。一人残る浩介。夜空を見上げている……。そこに貴子がやって来る。浩介、貴子に気付く。

浩介 ・・・おう。
貴子 どしたの？
浩介 ん？
貴子 遅いから。
浩介 ん、いや・・・星見えた。
貴子 ふうん。
浩介 今日はよく星が見えるよ。
貴子 今の、優子？
浩介 ん？
貴子 今歩いてったの。優子？

一瞬の間。

浩介 おお。
貴子 ・・・そう。
浩介 あ、偶然な。
貴子 ・・・ふうん。
浩介 たまたまだぞ、マジで。
貴子 ・・・。
浩介 懐かしくて、歩いてたんだって。
貴子 ・・・そう。
浩介 なんか大変みたいだな、ああいう仕事も。
貴子 ・・・。
浩介 いや・・・ほらなんかさ・・・今の世の中が、どうとかこうとか・・・現実が？・・・物語を超えちゃって・・・。

貴子、浩介に近づき手を差し出す。浩介の言葉が途切れる。

浩介 ん？

貴子 帰ろ。
浩介 ん？
貴子 たまには手でも繋いで、帰ろ。
浩介 (笑) マジで？
貴子 帰って、赤ワインでも開けよう。
浩介 ……
貴子 ほら。
浩介 ……

浩介、差し出された手を握らず、ゆっくりと口を開く。

浩介 東京ではさ、
貴子 (行き場を無くした手を下ろし) ……ん？
浩介 東京では、星なんか見えないんだってさ。
貴子 ……
浩介 ほら。

浩介、夜空を見上げる。貴子もつられて見上げる。
夫婦で夜空を見上げている。

浩介 見えないんだって、星なんか。
貴子 そう…。
浩介 俺、この町に残ってよかったよ。
貴子 ……
浩介 うん、良かったよ。
貴子 ……

夫婦は並んで、しばし夜空を見上げている。二人の距離は、長年連れ添った夫婦の距離である。やがて、浩介が手を差し出し、

浩介 よし、帰ろう！
貴子 おう！

貴子、浩介の手を握る。手を繋ぎ歩いていく夫婦…。

舞台は、七十年前に遡っていく。

若き日の喜一郎が町中に新聞を貼っていく姿が見える。

一九四八年（昭和二十三年）八月一七日。

大川邸。辻と阿久津が、大川を訪ねている。

大川がその日の朝刊を読んでいる。読み終わり顔を上げる。

大川 書いたねえ。

辻 はい。書きました。

大川 天下の朝日新聞が、何もこんな小さなことを大げさに書くことないじゃないの。

辻 小さなこと？

大川 ちよつと手がぶつかっただけじゃないの。

辻 ちよつと？殴ったじゃないですか。

大川 あんなの、殴ったうちに入らないよ。で、何しに来たの？これ見せに来たの？

阿久津 はい。読んで頂いたうえで反論がございましたら、取材させていただこうと思ひまして。

大川 反論あったら、載せてくれるの？

阿久津 筋の通った反論でしたら。

阿久津 我々の言い分だけ載せるのは公平ではありませんから。

大川 あるよお、反論あるよお。

阿久津 （メモ帳を取り出し）じゃあ、どうぞ。

大川 これ、間違ってる。

辻 どこがですか？

大川 僕の経歴ね、前科三犯て書いてあるでしょう。

辻 はい。

大川 正しくは、前科六犯だから。訂正しといて。

阿久津 訂正・・・するか。

辻 そう・・・ですネ。

大川 それとね、

辻 はい。

大川 （新聞を読み）この部分ね、「暴力団によって、二万三千の町民がしばしばゆすりや暴行にあっているが、河村組を手先に持っている大川議員が毎日警察に出入りするため、町民は頼むところがなく泣き寝入りをしている」って、これ、

辻 はい。何か間違ってますか？

大川 間違ってますかって、これはデタラメだよ。

辻 大川さんが、河野組の暴力を背景にこの町を支配していること、そしてその暴力が、町民を恐怖の底に突き落としていることは、事実です。
大川 ……

阿久津 現在、町民への取材を進めています。河村組と大川さんの関係について、そして、河村組からどんな被害を受けたのか。これから徐々に、紙面に載ることになりますので。

大川は鼻で笑う。辻と阿久津は顔を見合わせる。

大川はなおも笑っている。

二人 ……

大川 そううまくいくかね。

辻 はい？

大川 金も腕力も権力も持たない君たち新聞記者に、何の得にもならんことをペラペラ喋る人間がいるかなと言ったんだ。

辻 ……反論は以上でしょうか？

阿久津 では、これで失礼いたします。

二人は出て行こうとする。大川は大声で呼び止める。

大川 おい！

二人、立ち止まる。

大川 お前ら、本当にやるってのか。

さっきまでとは別人のようである。

大川 本当に、喧嘩するんだな。俺と。

辻と阿久津は顔を見合わせる。辻は大川に殴られた頬に手をやる。

辻 ……あなたが殴ったのは、僕の顔ではありません。

大川 ……

辻 あなたが殴ったのは、ジャーナリズムであり、民主主義であり、そして人間の自由です。

大川 ……

痛かったんですって、とつても。

大川 ……

どうしても、許せないんですって。

大川 ……

あなたと喧嘩はしません。我々は新聞記者ですから。我々は、ただ、文字を書くだけです。そして文字は、文字のままでは、暴力には勝てません。

大川 ……

でもね大川さん、文字には人を動かす力があるんですよ。

大川 ……

そして、沢山の人が立ち上がるとね、これは倒せるんですね、暴力を。

大川 ……

あなたと喧嘩はしません。我々はただ、文字を書くだけです。

大川 ……

お邪魔いたしました。

阿久津

二人、頭を下げて立ち去る。大川は立ち尽くしている。

大川は消え、「えびす屋」に明かり。

同じ頃。佐竹、郷田、田丸がいる。朝刊を手にしている。

郷田

「暴力の町（埼玉県本庄町）ここに一例」「ギャングを背景に町議が暴力脅迫 警察も手をこまねく」

田丸

随分デカく出ましたねえ。しかも東京版。

郷田

第一弾としては上出来じゃないですか？

佐竹

これで町の人も、もっと口開いてくれたらいいんだけどね。

田丸

なかなか喋ってくれないんですよ。怖がっちゃって。

佐竹

まあ、そうだろうな。

郷田

大川、どんな顔でこれ読みましたかね？

田丸

阿久津さん達、大川の言い分聞きに行くって言うってたけど、反論の余地ありますか、これ。

部屋の外から喜一郎の声。

喜一郎

すいません、失礼します。

佐竹

お、喜一郎君。いいよ、入って来て。

喜一郎 はい。

喜一郎、入ってくる。

喜一郎 お話し中失礼します。お客様です。
佐竹 客？

顔を見合わせる三人。

佐竹 どんな人？

喜一郎 はい。ご婦人です。

佐竹 ご婦人？

郷田 新婚の嫁さんですか？

田丸 いやいや、来ないでしょ。

郷田 一人寝が寂しくなつて会いに来たんじゃないですか？

田丸 からかうなよ。

佐竹 お通しして。

喜一郎 はい。

喜一郎、出て行く。暫くして、一人の女性が入ってくる。着物姿の品のいい女性である。三人顔を見合わせる。誰の知り合いでもないようだ。

田丸 あの、どちら様でしょうか？

婦人 お初にお目にかかります。河村千代子と申します。

田丸 河村さん……。

千代子 はい。河村浩三の代理で参りました。

田丸 あっ……。

郷田 あ、河村組の。

千代子 はい。主人は建設業を営んでおります。

三人の記者は眼を合わせる。すかさず佐竹が、

佐竹 はいはい、河村さん。どうされました？

千代子 こちら、朝日新聞の皆さままでお間違いないでしょうか。

佐竹 はいそうです。

千代子 辻さんとおっしゃるのは、どなたです？

佐竹 辻は今外出中でして。

千代子 そうですか。

佐竹 辻に何か？

千代子 銘仙横流しの記事をお書きになったのは、辻さんですよ？

佐竹 ええ、そうです。

千代子 今日の記事は、どなたが？

佐竹 ああこれですか、これは複数の記者で、ここの皆で手分けして書きました。

千代子 そうですか。

郷田 あのことどういったご用件で。

千代子 まだ書きますか。

郷田 はい？

千代子 まだ書きますか、と聞きました。

郷田 えっと……。

千代子 これでお終い？それとも、これから書きますか？

田丸 書きますよ。記者が一人、殴られていますので。

千代子 辻さんですね？殴られたのは。

田丸 そうです。

千代子 殴ったのは、町議会議員の大川さんですね。

田丸 ええ、そうです。

千代子 しょうがないわね、本当に。大川さんも、殴ることは無かったわよね。

郷田 あの方は、昔から血の気が多いのよ。

郷田 はあ……。

千代子 悪い方じゃないのよ。うちの人は、昔から大川さんにはお世話になってましてね、とつても面倒見のいい方ですよ。

佐竹 あの、ご用件は？

千代子 単刀直入に申し上げますね。

佐竹 はい。

千代子 もうここまでにしませんか？

佐竹 はい？

千代子 これ以上やっても、お互いの為にならないでしょう。

佐竹 いやあ……。

千代子 元はと言えば大川さんと辻さんの、個人的な問題でしょう。新聞なんか載せて、町を騒がせるようなことじゃないでしょう。

佐竹 町を騒がすつもりはありませんが、朝日新聞はこの問題を、単に大川さんと辻の個人的な問題だとは考えていませんよ。

千代子 そう事を荒立てることも無いでしょう。大川さんに謝らせるなりして、辻さんの顔が立てばよろしいでしょう？

郷田 大川は謝るって言うてるんですか？

千代子 おおかわ？

郷田 いや・・・大川さんは謝ると？

千代子 私が何とかしましょう。それで、辻さんと朝日新聞さんの顔が立つようにして差し上げましょう。

佐竹 河村さん。我々は、顔だとかなんだとかの為にやっているではありませんよ。

千代子 あら、じゃあ何のために？

佐竹 もっと大きなものの為に、我々は文章を書いているんです。

千代子 大きなもの？

田丸 報道の自由。民主主義。人々の幸福。そういったものの為にです。

千代子 ・・・。

佐竹 お役に立てず申し訳ありません。どうぞ、お引き取り下さい。

千代子はいら立ちを隠せなくなっている。

千代子 私たちは、これで上手くやってたのよ。

佐竹 はい？

千代子 この町には、河村とか大川のような人間が必要な。

佐竹 ・・・。

千代子 本庄の町に、何軒の繊維業者があるかご存知？

佐竹 ・・・いえ。

千代子 一二〇軒。

佐竹 はあ・・・。

千代子 銘仙の織子が何人いるかご存知？

佐竹 ・・・いえ。

千代子 三千人。三千人よ。

佐竹 はい。

千代子 正規の取引だけで、三千の人間が食べられるとお思い？

佐竹 ・・・。

千代子 どうして、全ての銘仙業者が、例外なく闇取引をしてお思い？

佐竹 ・・・。

千代子 食べるためでしょう。生きるためでしょう。

佐竹 ……。

千代子 あなた方は、正義の為だとか、民主主義だとか、自由だとか、高尚なことと並べたてるけれど、肝心の、庶民の生活に目が向いていますか？

佐竹 ……。

千代子 この町の、繊維の闇行為をお日様の下に引きずり出して、誰が幸せになりますか。

佐竹 ……。

千代子 町の花形産業を衰退させて、失業者を増やすだけじゃないですか。

佐竹 ……。

千代子 そういうことまで分かって、我々に喧嘩売ってらっしゃる？

佐竹 ……。

千代子 今の本庄の町は、長い時間をかけて、一番良いようになってるの。町民みんなで作り上げてきたの。それを、昨日今日来たばかりの新聞屋さんに、どうこう言う資格がありますか？

三人、千代子の話を聞いている。やがて田丸が……。

田丸 町民みんなで作りに上げてきたですって？

千代子 そうよ。

田丸 寝言は寝てから言ってくださいよ。

千代子 なんですって？

田丸 旧態依然とした、戦前からのヤクザ組織が幅利かせてるだけでしょう。

千代子 ……。

田丸 暴力でこの町を支配してるだけでしょう。

千代子 ……。

郷田 あなた方は、自分達の利益の為に、大川と手を結んで議会を支配して、警察を支配して、町民を恐怖の淵に追い込んでいます。闇で儲けた金が、町の人々の手に平等に行き渡ると言えますか？町民の生活を豊かにしていると言えますか？違うでしょう？自分たちの懐を潤してるだけでしょう。詭弁もいい加減にして下さいよ。

千代子 ……。

千代子は静かに口を開く。

千代子 ……あなた達、本当に河村組と構えるつもり？

佐竹 ……あなた方は、本当に朝日新聞と構えるおつもりですか？
千代子 ……。

佐竹 あなた方にとってはね、大川さんの暴力なんて日常茶飯事の、小さな出来事に過ぎんのもかもしれません。でも我々にとっては違う。人間としての誇りを守るための、命がけの闘いだ。

千代子 ……。

佐竹 我々がかつて、戦わずに筆を汚したことがあります。権力に屈して、信念を曲げてしまった過去があります。

千代子 信念を曲げた過去？

佐竹 はい。戦争です。開戦前には、販売部数拡大の為に開戦を煽り、戦時中は大本営発表を垂れ流し、真実を伝えることをしなかった。結果、あの悲惨な敗戦を招いたんです。新聞には、大いなる戦争責任がある。なぜあの時、戦争反対と叫び続けることが出来なかったのか。悔やんでも悔やみきれない痛切な反省の上に、我々は立っているんです。ジャーナリズムは、もう決して、あそこには戻らないと決めたんです。朝日も読売も毎日も関係ない。我々ジャーナリズムは、権力や暴力の圧力には決して屈しないと、三年前に誓ったんです。やっと手に入れた、「書く自由」を、二度と手放さないと誓ったんです。だから、書きます。

千代子 ……。

佐竹 地方記者に対する一発の拳がね、大新聞を動かしましたよ。

千代子 ……。

佐竹 明日、全国版の社説に、この件が載りますから。銘仙の闇取引の実態から辻君に対する暴力事件まで、本社が大々的に取り上げることになりました。

千代子 ……。

佐竹 もう止められませんかよ、この流れは。

千代子 ……。

佐竹 我々は、この町の人々と連帯します。そして必ず、暴力を追い出します。我々の、いや、人類の未来の為にね。

千代子 ……。

佐竹 どうぞ、旦那様と大川さんによろしくお伝えください。

千代子 伝えましょう。吐いた唾は吞めませんことよ。

佐竹 ええ、分かっています。

千代子 お邪魔しました。御機嫌よう。

出て行く千代子。入れ替わりに、喜一郎が入ってくる。皆無言。

佐竹 ふーう……。
田丸 ふーう……。
郷田 ふーう……。

深い溜息の後顔を見合わせ、笑い始める男達。

笑いは徐々に大きくなっていき、やがては大爆笑になる。

笑い転げる男達。

田丸 おっかないすねえ。
郷田 御機嫌ようですよ、御機嫌よう。
田丸 吐いた唾は吞めませんことよ。
郷田 山田五十鈴かと思いましたよ。

笑い転げる男達。やがて笑いは収まり、

田丸 いやあ、でも言つてやりましたね、支局長カッコよかったですよ！
郷田 人類の……未来の為にね。喜一郎も聞いてたか？
喜一郎 はい。カッコよかったです。
郷田 人類の……未来の為にね。
佐竹 からかうなよ。

皆笑っている。

郷田 でもね支局長、
佐竹 ん？
郷田 支局長の言う通りですよ。
佐竹 なにが。
郷田 我々はもう決してあそこに戻つてはいけません。信念を曲げてはいけません。
田丸 手に入れた自由を手放してはいけません。そういう戦いだと思つています。
郷田 本当の意味での戦後が始まるかどうか。
田丸 ええ。

田丸 これは、今を生きる我々の為だけの闘いではない。三十年後、五十年後、
佐竹 百年後を生きる、我々の子孫の為の闘いでもあると言ふことですね。
喜一郎 ああ、そういうことだ。

喜一郎 ……。

佐竹　しかしこれで、奴らがどう出るかな。ただ黙ってるとも思えない。

そこに、立て続けに窓ガラスの割れる音が聞こえる。

郷田　なんだ？

喜一郎　見えます。

喜一郎、出て行く。その間も音は続いている。

喜一郎が慌てて戻って来る。

喜一郎　大変です。

田丸　どうした？

喜一郎　ヤクザがビール瓶を・・・

郷田　なに？

喜一郎　河村組の連中です。家にビール瓶を投げつけてます。

佐竹　なに？

喜一郎　凄い人数に囲まれています。

皆出て行く。無人の室内に、窓ガラスの割れる音が響く。

外で佐竹たちが「やめろ」「やめろ」と口々に叫んでる声が聞こえる。

次々に投げ込まれるビール瓶。窓ガラスの割れる音。

やがて音が遠ざかり、時は現代に。喜一郎、優子、勝、浩介がいる。

喜一郎が、優子、勝、浩介に七十年前の思い出話をしていた。

浩介　何だか祖父がすいませんね、その節は。

優子　ホントよ。

勝　きっかけ信じられねえな、今となっては。この町でそんなことがあったなんて。

喜一郎　組長の女房はよ、ちよつといい女だったんだよ。

浩介　俺のお祖母ちゃんですか？

喜一郎　そうそう。

浩介　写真でしか知らないんですよね。

喜一郎　杉村春子みたいだよ。

優子　え？さつき山田五十鈴って言ってたわよ。

喜一郎　いや、違うな、あれだ岩下志麻だ、岩下志麻。

勝　誰でも良いよ！

優子 綺麗な人だったのね？

喜一郎 おおそうだよ。極道の女ってのは、みんな良い女なんだよ。

そこに貴子と数人の男たちが顔を出す。

貴子 浩介。みんな連れてきたよ。

浩介 おう。入れ入れ。

「失礼します」と言いながら、ぞろぞろと入ってくる作業着姿の男達。

七十年前の朝日新聞の記者たち（佐竹、阿久津、郷田、田丸）にそっくりである。

浩介 お父さん、紹介させてください。

喜一郎 ン。

浩介 うちの人間達です。

皆口々に、「こんにちは」「よろしくお願いします」など。

浩介 来週から、このメンバーでこの解体やらせてもらいます。身内の建物

つてこともあるし、歴史ある「えびす屋」さんだし、俺なりのリスぺクトの気持ちで、最強メンバー揃えました。

喜一郎 おおそうか。

浩介 今回、アルバイトは一切使いませんから。全員うちの社員でやりますんで。

喜一郎 ……ん？

喜一郎、椅子から立ち上がる。

勝 お、親父大丈夫か？

喜一郎、よろよると歩き、一人ずつ顔をじっと見ている。

喜一郎 ……。

浩介 お父さん？

貴子 どうしたの？

勝 親父？

喜一郎 おお、あなた方が。
男1 え？
喜一郎 あなた方が。
男2 あ、はい。
喜一郎 あなた方がここを壊すの？
男3 ・・・はい。
喜一郎 ふうん、そうかいそうかい。
勝 親父？どしたの？
喜一郎 それはそれは。

皆、戸惑っている。

喜一郎 あなた達に壊されるなら、この「えびす屋」も本望でしょう。
優子 お父さん？
喜一郎 うん。そうかいそうかい。

と言いながら、家の奥へ去って行く。

勝 どうしたんだ？親父。
貴子 うん・・・。
浩介 勝。
勝 ん？
浩介 ちよつと中見せてもらってもいいか？解体の段取り決めたいんだわ。
勝 ああ、はい。どうぞどうぞ。
浩介 じゃあちよつと、失礼します。皆も一緒に見よう。
男達 はい。

男達、「失礼します」と上がっていく。優子と勝と貴子が残る。
三人の間に、微妙な空気が流れる。

優子 ・・・。
貴子 ・・・。
勝 親父、ちよつと心配だろ？
優子 ・・・うん。
勝 もう年だからな。
優子 うん。八十・・・？

貴子 七。
優子 ……あ、うん。

沈黙。

貴子 ……親の歳も分かんないの。
勝 貴子姉ちゃん。
貴子 だって……。

沈黙。

勝 で、どう？久々のこの町は。
優子 ……。
勝 故郷に帰って来たなあって感じする？
優子 ……。

沈黙。

勝 おいおい、いつまで喧嘩してんだよ。やめようぜ、マジで。
貴子 別に喧嘩してないわよ。
優子 お姉ちゃんが喧嘩腰なんじゃない。
貴子 別に喧嘩腰じゃないわよ。
優子 今だってあんな言い方ないじゃない。
貴子 今って何よ。
優子 ちよつとお父さんの歳分かんなかった位で、あんな言い方ないじゃない。
貴子 ……。
優子 お姉ちゃんがそんなだから、私だって帰って来づらいんじゃない。
貴子 え、なに、私のせい？
優子 ……。
貴子 え、なに？あなたが実家に寄り着かないのは、私のせいなの？
勝 やめろって。

沈黙。

優子 別に、お姉ちゃんのせいだけじゃないけどさ……。
貴子 じゃないけど、何よ。

優子

・・・じゃあなんでさ、

優子は言いかけて口をつぐむ。

貴子

なによ。

優子

・・・。

貴子

なによ。

優子

じゃあなんで、お母さん亡くなるまで教えてくれなかったのよ。

貴子

は？

優子

なんでもっと早く教えてくれなかったのよ。

貴子

え、なに？私がわざとあんたに言わなかったって思ってたの？

優子

だってそうでしょ。分かっていたらもっと早く教えてくれたらよかったじゃない。

勝

優子姉ちゃん、違うって。葬式するときも言っただろ？あつという間だったんだって本当に。

優子

病気が分かった時に教えてくれたらよかったじゃない。

貴子

なに、そしたら帰って来たって言いたいのか？

優子

来たわよ。当たり前でしょ。

勝

やめろって。何百年前の話してんだよ。違うよ。貴子姉ちゃんのせいじゃないよ。優子姉ちゃんに心配かけないようにって、俺と父さんと貴子

優子

姉ちゃんとみんなで相談したんだって。

優子

・・・。

勝

本当だって。あんなにすぐ死んじゃうなんて思わなかったんだよ。

優子

・・・。

勝

悪かったよ。でも貴子姉ちゃんだけを責めるのは違うぜ。

優子

・・・。

貴子

東京出てから一度も顔見せなかったくせによく言うわよ。

優子

・・・。

貴子

家の事も、親の事も、ずっと放ったらかしにして、全部私たちにやらせといてよく言うわよ。

優子

・・・。

貴子

時々でも帰って来てれば良かったでしょ。それだけの話でしょ。

優子

・・・。

貴子

時々でも顔見せてればよかっただけの話でしょ。

勝

貴子姉ちゃんもさ、もういいよ。

優子

・・・帰って来れるわけじゃないでしょ。

勝

優子

優子

・・・

貴子 何で帰って来れるわけなのよ。
優子 帰って来れるわけないでしょ。
貴子 だから、なんでよ。
勝 もういいって。
優子 お姉ちゃんに恋人寝取られて、帰って来れるわけないでしょ！
貴子 はあ？
勝 (呆れて) 姉ちゃん！
貴子 あんた、私が浩介寝取ったと思ってるの？
優子 だってそうでしょ！どの面下げて、帰って来れるっていうのよ！

大声に驚き、浩介が戻ってきた。

浩介 どしたの？
勝 あ、浩介さん。
浩介 どうしたのよ。
勝 最悪のタイミングだね。
浩介 え？
勝 これ以上ないって位、最悪のタイミングだね。
浩介 あれ、俺いない方が良い？
勝 もう遅いね。むしろ居て。俺の手に負えない。
浩介 どういうこと？
貴子 違うよ、優子。私と浩介が付き合いだしたの、あんたが東京行ってだいぶ経ってからだよ。
優子 ……
浩介 こ、これは……この短時間で、なにがどうなって、こうなってんの？
優子 ……
貴子 (浩介には答えず) 本当だよ、優子。私、そんなことしてないよ。
浩介 お、おお、そうだけ。俺そんなに器用じゃねえよ。
貴子 あんた黙ってて。
浩介 お、おう。おう。

優子は泣き出している。

優子 だってお姉ちゃん、ずっと浩介の事好きだったでしょ？子供の頃から。
貴子 それは、子供の頃の話でしょ？
優子 ほら、そうじゃない！

貴子　でも、全然違うから。あんたたちが付き合ってる時は、何にもないから。
あぁもうやめよう、この話。
勝　ホントだぜ、マジで、何千年前の話で喧嘩してんだっつーの。
貴子　もしかして、あんた、本気でずっとそう思ってたの？だから結婚式にも
来なかったの？
優子　・・・。
貴子　ちよつと勘弁してくれる？誤解だから。全くの誤解で私恨まれてたの？
優子　・・・。

長い沈黙。優子のすすり泣く音だけが聞こえている。
沈黙を破り、やがて浩介が口を開く

浩介　・・・これさ、なんつーか・・・人生ってさ、色々あると思うのよ。
貴子　あんたが言うな。
浩介　いやいやいや、色々あるよお、家族の問題ってさ。そう簡単じゃないと
思うのね。
貴子　だから、あんたが言うな！
浩介　いいじゃんよ。俺だって家族だよ。言わしてよ。
貴子　・・・。
浩介　だからさ、時間かけて、また話さない？
貴子　なにまとめてんのよ。私だって言いたいこと沢山あるわよ。
浩介　わかるけど、一長一短では解決できないでしょ、こういうの。

沈黙。

勝　・・・ん？一長一短？どういうこと？
浩介　・・・ん？
優子　・・・一朝一夕。
浩介　あぁそうかな？
勝　浩介さん、難しい事言おうとしないでいいよ。
浩介　あ、馬鹿にした？俺の事馬鹿にした？
勝　いや、してないですよ。でも一長一短って・・・。いい事言おうとしてる
のに・・・台無しですよね。
浩介　うるせーよ。

四人、ほんの少しだけ笑いあう。

佐竹 今のところ、何件きてる？訂正記事を載せろという要求は。

辻 直接言ってくるのは二件ですね。三十万恐喝事件の、中山道沿いの金物屋の吉田さん。それから十五万恐喝の元町会議員の清水さん。この二件です。

佐竹 うん。

阿久津 吉田さんと清水さんの言ってることは全く同じですね。「あんな話はない。朝日が勝手に書いたことだから、すぐにでも訂正して欲しい。」とこうです。河村組との金のやり取りは認めていますけど、ただ貸しただけだと、決して恐喝なんかされていらないと言うところも一緒です。同じように言わされてるんでしょう。

佐竹 うん。

田丸 もう一件、二十万恐喝の金沢さんに至っては、新聞記者になんか会ったこともないと言いつらしているそうです。僕は名刺交換までしてるんですよ、ほら。

と言つて名刺を取り出す。

佐竹 うん。まあ河村組から圧力がかかっていると考えていいだろう。

辻 どうします？載せるんですか？訂正記事。

佐竹 ……

阿久津 支局長。

佐竹、しばし考えてから。

佐竹 取り消し要求などお笑いだね。証拠がないと思って、言った言わないの水掛け論に持ち込もうとしてるだけだ。我々を引っ掻き回そうと、神経戦を挑んでいるんだよ。

阿久津 うんなるほど。

佐竹 これは全て、間違いなく二人組で取材しているね？

郷田 はい、間違いありません。だよな？

田丸 はい。単独行動はありません。

佐竹 よし、それなら、こんな要求は無視していい。

阿久津 支局長、腹座ってますね。

佐竹 座ってるんじゃないよ。

阿久津 はい？

佐竹 立ってるんだよ。

阿久津 立ってる？

佐竹 ああ。猛烈に、腹が立ってるんだよ。

阿久津 支局長。

佐竹 奴らは、どこまでも報道というものを馬鹿にしてる。

郷田 ああ。

佐竹 記事は訂正しない。明日の見出しはこうだ。「釈明や取り消しに回る 新

聞談話で後難を恐れる町民」これでいこう。

田丸 攻めますねえ。

佐竹 弱みを見せたら付け込まれる。引き続き予定の取材行動を進めてくれ。

阿久津 はい。我々も、少し焦ったことは確かです。一日でも早く記事にしたく

て、ちよつと強引にやりすぎた。

郷田 ああ、それはありますね。

辻 敵が敵だけに、もう少し取材対象と信頼関係を作りながらやりましょう。

佐竹 特に、組長の河村が直接関わっている事件。この証言を取って来てくれ

皆 はい。

皆口々に返事をして、部屋を飛び出していく。

喜一郎が町中に新聞を貼っている姿が見える。

八月二一日。夜。同じく「えびす屋」

前場の五人が集まっている。

佐竹 やったね。

田丸 郷田組やりました。

阿久津 阿久津、辻組もやりました。

佐竹 これはどちらも、間違いなく河村が犯罪行為に直接関わっている？

田丸 間違いありません。

辻 はい。間違いありません。

佐竹 詳しく聞かせてもらおうか。

田丸 じゃあ、うちから。ここから一里ほど離れた、大里郡榛澤（はんざわ）

村で取材してきました。榛澤村の久保田さんというご老人が、河村から酷い目にあつたという噂を聞きつけまして、郷田と自転車で向かいました。最初は怖がつて何も話してくれませんが、本庄で暴力団撲滅の大キャンペーンを張つてると言つたら、震えながら、ポツリポツリと話して下さいました。

以降、久保田の話の内容が、劇中劇として再現される。

河村、久保田、久保田の娘が現れる。河村は日本刀を持っている。

河村 お前、今日俺が東京の仲間と、高橋の家に殴り込みをかけることを高橋にバラしただろう。

久保田 (首を振り) 俺は何も知らん。

河村 しらばつくれても無駄だぞ。お前以外にいるはずがねえんだ。俺はな、犬が大嫌いなんだ。お前が犬をしたことで、俺は東京の仲間に対して顔が潰れ、指をつめるか腹を切らねばならないことになった。だから、お前の命を貰いに来た。

河村は日本刀を抜く。

久保田 ひい！

娘 お父さんを殺されては、私たちは生きて行けません。命だけはお助け下さい。

河村 親の命を助けたければ五万円出せ。

娘 五万円！そんな大金ありません。

河村 じゃあいくらなら出せるんだ。

娘 二万円で堪忍して下さい。

河村 そんなはした金で命が拾えるか！

田丸 仕方が無いので、親戚のところから二万七千円を借り、近所の栗原医院という病院で三千円借り、合わせて五万円にして差し出したそうです。

河村 (懐から証文を取り出し) 恐喝になるから証文を置いていく。これは借りた金だからな。訴えても無駄だぞ証文があるからな。それでももし訴えたら、殺すぞ。

と言って、河村は出て行く。

田丸と郷田は、久保田と娘に話しかける。

郷田 そのまま泣き寝入りですか？

娘 いいえ。その日のうちに、警察に相談に行きました。

郷田 そうしたら？

娘 河村組を相手にすると、後々面倒なことになる。今の世の中は物騒だからあきらめろ、と言われました。

郷田 本当ですか？

娘 ええ。警察でそう言われてしまったらもう仕方がないので、諦めました。

郷田 河村とはそれつきりですか？

娘 いいえ。それから度々たかられました。

郷田 いくらくらいですか？

娘 その時によつて違います。五千円とか一万円とか、そういう額です。

郷田 全部でいくら？

娘 十四万五千円とられました。

郷田 十四万五千円！？

娘 はい。

郷田 七十年後の日本では千五百万円に値する額じゃないか！

田丸 久保田さん。

久保田 はい。

田丸 これを、記事にしてもいいでしょうか？

娘 それは困ります！

久保田 ……。

田丸 これはあまりにも酷い。後のことを恐れている時代ではありません。我々を信じて、一緒に戦って下さいませんか？

久保田 ……いいですよ。

娘 お父さん！

久保田 新聞社の方が、ここまで言ってお下さってるんだ。我々も腹を括ろっじやないか。

娘 ……。

久保田 どうぞ宜しくお願いします。

娘 お父さん！

久保田と娘は去って行く。

佐竹 間違いない、書いてもいいと言ってお下さったんだね？

田丸 はい。何度も確認しました。

郷田 覚悟を決めて下さいました。

阿久津 ……しかし酷いな。

辻 警察もだらしないですね。

阿久津 国定忠治時代だな。

辻 忠治の時代だって、もっとしつかりした十手取縄がいたでしょう。

阿久津 じゃあ、こつちも報告しますね。

佐竹 ああ、頼む。

阿久津 こつちは更に強烈ですよ。辻。

辻 あ、はい。我々は、児玉郡北泉に行つて来ました。こちらは、事件の背景を少しご説明しなければなりません。

須山三平（二二）が現れる。

辻 こちらは被害者の、須山三平君二十二才です。

和子（二四）現れる。

辻 そして三平君の恋人であります、和子さん二十四才。

美代子（十七）現れる。

辻 そして世間の噂では、三平君は和子さんの妹、美代子さん十七才とも関係があると言われ、利根川沿いなどで二人を見かけるものがあるようになったのが今年の春のことだそうです。しかし、これが悲劇の始まりでして、この姉妹には二十六才になる金太というお兄さんがいます。

金太（二十六）現れる。

辻 そしてこの金太がなんと、河村組の組員でした。

田丸 あちゃあ・・・。

辻 でもそんなことは露知らずの三平君。両手に花の乱れた青春を謳歌しておりました。しかしこれ、バレます。二股がお姉さんとお兄さんにバレて、妹の美代子さんから一緒に逃げてくれと頼まれます。そして神戸から仙台から、およそ二か月の逃避行の旅に出ます。しかし、親戚を頼っていたため居場所がすぐばれ、仙台から連れ戻されます。そして、三平君は河村の自宅に監禁されることとなります。ここでは、嫉妬に狂った和子さんが、美代子さんを滅茶苦茶に殴りつけます。

以下、再現。和子が美代子の髪の毛をつかんで引きずり回している。

三平は、両手を結ばれ正座させられている。金太が日本刀を、河村がピストルを手に立っている。

美代子 痛い痛い痛い痛い！！

和子 あんた、ふざけんじゃないわよ！舐めた真似してんじやないよガキが！

美代子 痛い痛い痛い痛い痛い！

和子 うるさいんだよ！！妹のくせに、妹のくせに！

美代子 痛い痛い痛い痛い！

和子、髪の毛を離す。美代子は和子から逃げる。

美代子 何すんのよ！痛いじゃないのよ！

和子 あんた、人の男に手え出してんじやないわよ。クソガキが！

美代子 三平さん、姉さんより私が好きなんだって。私の方が優しいって。ね、

三平さん。

三平

和子 美代子あんたねえ……いい加減にしなさいよ。

美代子 体の相性も私の方が良いんだって。若いから、柔らかくって気持ちいいんだって。

和子 お前、ぶっ殺してやるよ！

再び美代子に向かっていく和子。美代子は逃げる。

和子 ぶっ殺してやるよ！

美代子 自業自得でしょ。私の方が若いんだから。

和子 はあ！？自業自得の意味分かってないだろ。馬鹿だろお前！

逃げる美代子、追う和子。それを見ている三平と河村。

河村がピストルを天井に向け威嚇射撃する。その音に驚き静かになる。

河村、ピストルを金太に渡し、日本刀を手にする。

河村 さて、三平君。

三平 ……

河村 この二人は、うちの大事な組員の妹なんだ。そうだな、金太。
金太 はい。

河村 若くしてキズものになった姉妹二人が、一生楽に暮らせるように、二人に家を建ててやれ。

三平 いいい、家ですか……。

河村 それが無理なら、姉妹を元通りの体にして返せ。

三平 元通り……。

河村 当然だろう。お前がキズものにしたんだ。元通り、処女の体にして返せ。

三平 ……しよ、処女……。

河村 それが無理なら、金で解決するしかないなあ。

三平 ……。

河村 三十万出せ。

三平 さささ三十万！むむむ無理です！無理です！

河村 出来なければ、お前は、棺桶に入ることになる。

三平 かかかか家族とそそそ相談させてください。かかか家族と！

再現劇の登場人物達、去る。

辻 何と言われても、三十万なんて大金は払えるわけがありませんで、何とか様子倒して、十万円に負けてもらったそうです。

田丸 負けてくれたんですか？

辻 負けてくれたみたいですよ。それでも十万円ですよ。七十年後の日本では……、

郷田 一千万な。

辻 ……。

郷田 それで、払えたのか十万円。

辻 東京都足立区に住む親せきを頼って、なんとか十万円を工面してもらい支払ったそうです。でもその場所で、やっぱり残りの二十万も持ってこいと言われ、断ると木刀で気絶するまで殴られたそうです。

佐竹 これ、警察には届けたのかい？

阿久津 はい、届けたそうです。でもこれもさっきの久保田さんの話と同じですね。諦めなさいと言われたそうです。

佐竹 酷いね。監禁、恐喝、暴行。それにピストルまで撃ってる。犯罪のオンパレードじゃないか。

田丸 これは、記事にすることには同意してくれてるの？

辻 はい。是非にと。

郷田 この二つ載せたら、世論が黙ってないでしょう。

田丸 さすがに警察も動かざるを得ないんじゃないですか？

佐竹 うん、どの角度から見ても、直にガラを持っていける事件だ。よし、書こう。

郷田 よつしや。

そこに、部屋の外から喜一郎の声。

喜一郎 失礼いたします。

田丸 おう、喜一郎か。

喜一郎 はい。

佐竹 いいよ、入っておいで。

喜一郎 はい、失礼します。

喜一郎、入ってくる。

喜一郎 お忙しいところすみません。ちょっとよろしいでしょうか。

佐竹 ああいいよ。

喜一郎 ご相談がございました。

郷田 どうした？

喜一郎 はい。皆さんが本庄に来てからのこの数日間、僕たち本庄読書会は、毎日のように会合を重ねてきました。

佐竹 うん。

喜一郎 どうにか、皆さんと連帯できないかと思って毎日、朝日新聞を町中に手分けして貼ってきました。

佐竹 ああ。知ってるよ。

辻 お陰で、町中の人達に読んでもらえる。

田丸 表を歩いてると、沢山激励の言葉をもらうよ。君たちのお陰だよ。

喜一郎 それですすね、

田丸 うん。

喜一郎 僕たちの呼びかけで、本庄仲町青年団、地区労連、俳句団体「暖流」、農協、生協、教員組合、文化協会、そして消防団有志とですね、「町政刷新期成会」という団体を立ち上げるようになりました。

阿久津 町政刷新期成会？

喜一郎 はい。当初は、社会党や共産党の青年部も一緒にやろうとしていたんですが、あらぬ誤解を避けるため、政党の参加を認めずに純粹の町民運動団体として出発致しました。

郷田 ほう。立派じゃないか。

喜一郎 それで今日、その結成式があったんです。そしてその場所で、来たる八月二十六日に、本庄小学校の校庭で町民大会を開催することに決定しました。

辻 町民大会？

喜一郎 はい。

辻 なにするの？その町民大会は。

喜一郎 封建的暴力とその背後の反民主的政治勢力に対する闘争の決意表明をする大会です。

郷田 おー、凄いなあ。それ、学生さんが中心で？

喜一郎 はい。主に大学生と我が読書会のOBが中心です。

郷田 いいねえ、若い力っていうのは。

阿久津 で？相談というのは？

喜一郎 はい。僕たちはこの町民大会を、この町から暴力を追い出すための重要なきっかけにしたいと思っています。

阿久津 うん。

喜一郎 その為に、なるべく沢山の町民に集まってもらいたいと思ってるんです。

阿久津 ビラも沢山刷って町中に貼りだします。

阿久津 ああ。

喜一郎 そこでお願いがあります。どうか、町民大会のことを朝日新聞で記事にしてもらえないでしょうか。僕たちがビラを作るより、はるかに効果があると思うんです。

阿久津 なるほど。

喜一郎 図々しいお願いで恐縮です・・・ダメでしょうか？

阿久津 どうです？支局長。

佐竹 駄目なことあるもんか。

喜一郎 え？

佐竹 君の話を知っている途中から、記事にしようと思ってたよ。

喜一郎 本当ですか？

佐竹 ああ。大々的に宣伝しよう。

喜一郎 ありがとうございます！

喜一郎も記者たちも嬉しそうだ。

佐竹 大会は二十六日だっけ？

喜一郎 はい。

郷田 なんだ、一週間もないじゃないか。

喜一郎 はい。皆の熱が冷めないうちに、なるべく早くやっちまおうってことになって。

阿久津 いいねえ、若いって言うのは。じゃあ、これ俺が担当しますよ。

佐竹 ああ、頼むよ。

喜一郎 ありがとうございます。みんな喜びます。

田丸 いやいよ本格的な共闘体制になってきましたね、新聞と町との。

辻 ホントですね。

佐竹 ああ、我々は、今後の報道の在り方のモデルケースになれるかもしれないぞ。喜一郎君、一緒に頑張ろう。

喜一郎 はい！

喜一郎と記者たちが、町民大会開催のビラを町中に貼っている姿。
八月二十三日午後。「えびす屋」。五人の記者たちがいる。

郷田 逮捕状？

田丸 本当ですか？

阿久津 ああ。警察も検察も慌ただしく動いてる。

郷田 いつ出ますか？

辻 おそらく明日には。

郷田 やりましたねえ、支局長。ついに河村組長逮捕ですよ。

佐竹 それは、間違いない情報かね？

阿久津 間違いありません。署長から直に聞きましたから。

辻 はい。検察でも聞いたんで間違いないでしょう。

阿久津 検察にもプライドが残ってましたね。あそこまで書かれたらやらないわけにいかないよ。

辻 我々の記事が、動きましたよ。

田丸 ついに、ついにここまで来た・・・。

郷田 まだまだ、初めの一步だ。本丸はこの先だろう。

阿久津 ああ、その通り。議会の不正に食い込んでいかにや。

田丸 じゃあ河村の逮捕記事、いつでもいけるように作るとききますね。

佐竹 ああ頼むよ。しかしこれ、一つ悩みがあるな。

田丸 悩み？なんですか？悩みって。

阿久津 ええ、そうなんですよ。

田丸 え？なんですか？

阿久津 写真ですよね？

佐竹 ああそうだ。

田丸 ……あ。

佐竹 河村の写真を持ってないだろう、我々は

田丸 確かに。

佐竹 写真が無けりや、肝心の記事が台無しだ。

郷田 そりゃそうだ。

阿久津 そうなんですよ。そう思つて帰りがけに辻と一緒に、町の写真館を回つたんです。

辻 どこも仕返しを怖がつて出してくれませんか。「絶対君のところから貰つたとは言わないから」と言つても駄目ですね。

阿久津 万一分かつたら火をつけられるとか、家族全員皆殺しにされるとか、穏やかじゃないですよ。

辻 五千円出すと言つても駄目でした。

田丸 五千円!?

辻 はい。

田丸 五千円でもダメかあ。

辻 写真館から貰うのは諦めた方が良いでしょうね。

郷田 じゃあ、直接本人に会つて撮影するしかないってことか?

佐竹 そういふことだな。

郷田 「組長、逮捕された時の記事に載せる写真を撮らせてください」つて言つて、撮らせてくれるか?

田丸 無理でしょうねえ……。

辻 無理でしょう……。

阿久津 うん、無理だろ……。

重たい空気が包む。

佐竹 明日の逮捕だと言つたね?

阿久津 ええ、おそらく。

佐竹 ということは、記事が出るのは明後日の朝だね。

阿久津 ええ。

佐竹 それには遅くても明日の昼の汽車で、本社に送らないと間に合わないね。

阿久津 そういうことですね。

郷田 逮捕が午前中ならその時に撮つちまえばいいけど、もし午後になったら、

その時撮影しても写真が載るのは一日遅れになりますね。

田丸 それはカツコ悪いですねえ。

阿久津 カツコ悪いよ。

辻 どうしましうね。

阿久津 どうしましうもこうしましうもないだろ。

辻 え？

阿久津 撮って来るしかないだろ。

辻 え？直接ですか？

郷田 それしかないか。

佐竹 いやいよ敵の本陣に乗り込むか。

阿久津 行きましよう。その方が話が早い。

田丸 でも、何と言って乗り込みます？朝日新聞だと言ったら会わないでしよう。

辻 会わないどころか、殺されますよ。

阿久津 朝日と言わなければいいだろ。いいじゃないか、読売でも毎日でも。

郷田 よし、出たとこ勝負で行ってみるか。

郷田立ち上がるが、佐竹が止める。

佐竹 あ、郷田と田丸は、河村の奥さんに顔が割れてる。

郷田 あそうだ。

辻 え・・・てことは？

皆、阿久津と辻を見る。

阿久津 俺と辻で行くしかないな。

辻 おっかないなあ。

郷田 頑張ってこい。骨は拾ってやるから。

辻 田丸さん、

田丸 ん？

辻 田丸さんの新しいパンツ履いて行っていいですか？

田丸 ああ、貸してやるよ。

皆笑う。

佐竹 くれぐれも無理はするなよ。危険な目に遭いそうになったら、すぐ引き上げるように。

二人 はい。

その日の夕方。河村邸、居間。
河村と千代子、そして読売新聞記者のフリをした阿久津、辻が向かい合っている。

辻　　すいません、急にお邪魔しまして。

河村　おたくら・・・本当に読売新聞かね。

阿久津　はい？

河村　本当に読売新聞かね。

阿久津　はい。本当に読売新聞です。

河村　朝日じゃないでしょうな。

二人　・・・

河村　もし朝日だったら・・・

辻　　朝日でしたら？

阿久津　でしたら？

緊張が走る。

河村　怒っちゃうよ、僕。

阿久津　朝日ではありません。

千代子　この人たちは朝日新聞の方ではありませんよ。私がえびす屋さんにお邪魔した時には、いらっしやいませんでしたからね。

河村　うむ、そうか。

千代子　ええ。朝日の方々よりも、お二人の方が何と言いますか、インテリジェンスを感じますわ。

阿久津　は、恐縮に存じます。

辻　　ありがとうございます。

河村　で、ご用は？

阿久津　いえ、最近の朝日新聞の一連の報道に対して、どのようにお考えか伺いたくて参りました。
河村　ほう。

辻はメモ帳を取り出す。

辻　　我が社と致しましても、別の角度から一連の報道を検証しようと思っ
して。

河村　いやあ、朝日新聞は実に憎い。

阿久津 ええ、お察しいたします。

辻 よく分かります。

河村 あれは共産党だ。アカだ。だから私のようなものを暴力団呼ばわりして
るのだ。

阿久津 けしからんですな。

辻 全くです。

河村 原田組の原田が逮捕された時は小さく書いておきながら、私は逮捕もさ
れていないのに全国版のトップ四段抜きで書いている。偏向報道も甚だ
しい。

阿久津 偏った報道はいけませんねえ。

辻 あくまでも中立でないとね。

千代子 よくお分かりですわね、あなた方は。

河村 朝日新聞は決してこのままにはしません。

辻 と、申しますと。

河村 近いうちに必ず、潰しにかかりますよ。

千代子 (河村を諫める) あなた。

阿久津 ええ・・・それが宜しいかと。

辻・・・先輩、そろそろ。

阿久津 ん？ああ。では、これで我々は失礼いたします。

千代子 あら、もうお帰り？

河村 まだほとんど話してないじゃないか。

辻 いえ、もう充分伺いました。

阿久津 ええ。あのお、最後にですね・・・

河村 あんたがた、本当に読売新聞かね。

阿久津 はい？

河村 本当に、読売新聞かね。

阿久津・・・はい、本当に読売新聞です。

辻・・・本当に読売新聞です。

河村 もし朝日だったら・・・

阿久津 もし朝日でしたら？

辻 でしたら？

緊張が走る。

河村 暴れちやうよ、僕。

阿久津・・・違いますよお。

辻 暴れないで下さいよお、読売ですから。

阿久津 あのお、もしよろしければですね、最後にお写真を一枚。

河村 おお、写真撮りますか。

阿久津 ええ、よろしいでしょうか？

河村 はいはい、構いませんよ。

千代子 どこで撮りましょう。

辻 フラッシュを持ってきていないので、表でもよろしいですか？

河村 はいはい、いいですよ。

千代子 じゃあ、庭に出しましょうか。

辻 よろしいですか？

阿久津 恐縮です、すぐ済みますから。

河村 いえいえ、いいですよ。男前にお願ひしますよ。

辻 ええ、それはもう、任せて下さい。

四人は表へ出て行く。表から声が聞こえる。

河村 本当に読売新聞なんですわね？

阿久津 ええ、本当に読売です。

河村 朝日だったら、大変なことですよ、これは。

辻 朝日ではありません。

千代子 こちらでいかがですか？

阿久津 ああ素敵なお庭ですわねえ。

千代子 へチマが邪魔かしら。

四人の話す声に重なり、地鳴りのような音が遠くから聞こえてくる。

それは、町民大会に集まってくる本庄の人々の熱気である。その音はだんだん近づいて来る。

辻 あ、じゃあ先輩、ちよつと葉っぱを押さえてもらっていいですか？

阿久津 お、これでいいか？

辻 ああ、良いですねえ。暗くなってきたので、十分の一、五分の一、二分

のひと、三枚撮らせてください。

河村 はいはい。こんな感じで良いかな？

辻 良いですねえ、よつ色男！

河村 はっはっは。上手いね、君。

辻

ではまず二分の一からいきますね。動かないでくださいね。はい、撮りまーす。

シャッター音と共に大勢の人々の声と熱気が弾け、舞台を包む。

八月二十六日。本庄小学校の校庭。町民大会が行われている。

「言論の自由を守れ」

「ボスと暴力団を一層しろ」

「警察や検察長を粛正せよ」

「我々の自治能力を世界に示せ」

「我らの手で明るい町へ」等の垂れ幕がかかっている。

佐竹、阿久津が校庭の片隅で、続々と集まってくる町民を見ている。

その数の多さに言葉が出ない。感無量の二人。

やがて佐竹が口を開く。

佐竹

・・・こりゃあ凄いな。

阿久津

ここまで集まるとは思いませんでしたね。

佐竹

何人いると思う？

阿久津

見当もつきませんね。どう数えていいか。

佐竹

賭けようか。近い方に一杯奢る。

阿久津

お、いいですよ。支局長からどうぞ。

佐竹

んー、六千つてとこかな。

阿久津

そんなにいますか？人口二万ちよつとの町ですよ。

佐竹

それ位はいるだろう。

阿久津

んー、じゃあ僕は五千で。

郷田が来る。興奮で息が上がっている。

郷田

いやあ凄いな、中山道見てきたんですけどね、途切れなですよ人の波が。

佐竹

まだ集まって来るかい？

郷田

まだまだ。七、八千集まるんじゃないですか？

阿久津

え？そんなに？

郷田

ええ多分。

佐竹

勝ったね。

阿久津

はいはい奢りますよ。

郷田

なんすか、面白そうじゃないすか。

阿久津

一瞬で負けたよ。

郷田 あ！あとね、ついに来ましたよ。
佐竹 なにか？
郷田 他社が！
佐竹 来たか！
郷田 はい！
阿久津 おー！来たー！

やつと他社が後追い記事を書くことになった事実には喜ぶ三人。三人は固い握手を交わす。これまでの孤独な戦いが報われた瞬間。

郷田 僕が確認しただけでも、読売、毎日、埼玉、それに共同が来てます。
阿久津 ざまあみる。遅いんだよな。
郷田 読売の阪本君と立ち話したんですけどね、うちがあんまりやるもんだから、昨夜からキリキリ舞いですって。
佐竹 だから言ったんだよ最初に。共同戦線張らないかって。
阿久津 素直にやったりや良かったんだよ。

田丸、辻がやって来る。やはり興奮している。

郷田 お、戻って来た。
佐竹 どうだった。
田丸 いやあ、ひっそりと静まり返ってますよ街中は。廃墟ですよ廃墟。
辻 今日ばかりは、町全体がこの大会の為にあるという感じですね。
佐竹 読売も毎日も来てるそうじゃないか。
辻 ええ。会いましたよ、そこで。ほら、最初に共闘を持ちかけた毎日の増田さん覚えてます？
佐竹 ああ覚えてる。全く渋い顔してたな。
辻 そう。あんな渋い顔してた増田さんが、もう活き活きしちゃって。
佐竹 (笑)世の中がここまで動いたら、もう頬かむりはできない。否が応でも書かざるを得ないよ。
辻 ええ、そうですね。
田丸 あ、そう。現時点での主催者発表の人数出てますよ。
阿久津 お、何人？
田丸 一万二千人ですって！
阿久津 一万二千人！？
田丸 はい！

郷田 もっと増えるってことだろ？

辻 最終的には、一万四千辺りで落ち着くだろうと。

郷田 二万三千だろ？全町民。

辻 はい。

佐竹 凄いな。有権者の全員、いやそれ以上の人間がここに居る計算だね。

五人、言葉が出ない。ただ、集まってくる人々を眺めている。

感無量で一万二千人の群衆を眺めている五人の姿……。やがて、

郷田 ……動きましたね。

阿久津 ああ……動いたね。

田丸 動きましたねえ……。

佐竹 動いたねえ。

辻 ペンで……人が。

皆、無言で群衆を眺めている。涙ぐんでいる者もいる。

そこに学生服姿の喜一郎がやって来る。

郷田 おう、学生！

喜一郎と五人の新聞記者は、握手を交わしていく。

郷田 やったな！

喜一郎 皆さんのお蔭です。本当にありがとうございます！

佐竹 いや、我々はきっかけを作っただけだよ。

阿久津 これだけの人を動かしたのは、君たちのエネルギーだよ。

田丸 ああ、君たちが動かしたんだ。

辻 おめでとう。

喜一郎 ありがとうございます。でもまだ戦いは始まったばかりです。

辻 そうだな。

喜一郎 僕たちの自由は、絶え間ない努力で勝ち取っていかねばいけない。

僕たちの未来は、僕たちの手で作っていかねばいけない。

辻 ああ。

喜一郎 皆さんに教わったことです。

壇上のマイクで話し始める議長の声が聞こえてくる。

声 「えー只今ここに、本庄町の町民大会の開催を宣言する。」

割れんばかりの拍手が聞こえる。

以下の演説の間に新聞記者達の姿は消え、舞台上は喜一郎の姿だけになる。

声 「大会宣言。今日、民主化が強く叫ばれ過去の封建的勢力は一部その姿

を消したとはいえ、その勢力は依然として全国に強く根を張り、時としては政治権力と結びつき、暴力を持って民主化の前途を拒もうとしている。この度記者殴打事件から端を発した本庄事件の真相は、実にかかる保守勢力と結びついた暴力に対する我々町民の闘いに他ならない。今や我々は愛する郷土より一切のボス暴力団を追放し、民政を我らの手に取り戻すべく決起しなければならぬ。本日ここに歴史的町民大会が開催されるにあたり、真に民主的討論を尽くして、この町より悪の温床を根絶し、速やかに平和な本庄町を再建することを期す。右、宣言。」

喜一郎が一人暗闇に浮かび、開催宣言を聞いている。やがておもむろに、大会決議を話し出す。

喜一郎 大会決議。一つ、太田警察署長並びに幹部の罷免。一つ、飯塚検察庁事

務官の罷免。一つ、警民協会の解散。一つ、公安委員の総辞職。一つ、全国的暴力団狩りの要求。以上五項目の決議を満場一致で可決。本庄の町の新しい歴史のページが始まったのだ。我々の未来は、我々の手によって、作っていくかなければならない。我々の自由は、我々の絶え間ない努力によって、これを勝ち取っていくかなければならない。

割れんばかりの歓声と拍手が響く中、暗転。

明かりがつくと、時は現代に戻っている。

二〇一八年、秋の始まり。鮮やかな夕焼けである。

解体が終わりに、更地になった「えびす屋」跡地。

喜一郎、優子、貴子、勝、浩介、河村建設の男たちがいる。

喜一郎 おー、何も無くなって・・・。

浩介 はい。心を込めて、解体させていただきました。

頭を下げる河村建設の男達。

貴子 狭く感じるね、こうなると。

勝 ……うん、確かに。

貴子 寂しいね、やっぱり。

勝 ……うん。

優子 ……。

喜一郎がおもむろに口を開く。

喜一郎 主催者発表で一万四千……。

貴子 ん？

喜一郎 読売は八千。朝日は間を取って一万。下らん綱引きやってたんだよ、昔から、新聞は。

貴子 (勝に) 何の話？

勝 あれだよ、ほら、本庄事件の時の町民大会。

貴子 ああ。

喜一郎 でもなあ、確かにここにいたんだよ、彼らは。

皆 ……。

喜一郎 ここから始まったんだよ、この町の自由は。

皆 ……。

喜一郎 彼ら言ってたよ、未来のための闘いだってよ。

皆 ……。

喜一郎 百年後の為の闘いだってよ。

皆 ……。

喜一郎 お前ら、自由か、今。

貴子 お父さん？

喜一郎 お前ら、生きてるか、今。

勝 親父。

喜一郎 ん？お前ら、生きてるって言えるか？

皆、何と答えていいか分からない。優子が喜一郎に歩み寄り、

優子 お父さん。

喜一郎 ん？

優子 私、明日帰るね、東京に。
喜一郎 おう、そうか。
優子 ねえお父さん。
喜一郎 ん？
優子 お父さんに聞いた話さ、私、書いてもいい？
喜一郎 ん？
優子 お芝居にしてもいい？
浩介 お、社会派劇作家。
優子 どんな風になるか分からないけど、私の生まれ育った故郷の話として、書いてもいい？
喜一郎 ……。

優子は貴子の方に向き直り、

優子 お姉ちゃん、いい？
貴子 なんで私に聞くのよ。
勝 それいいじゃん、見てみたいよ。
浩介 それ、本庄でもやんないの？
勝 お、いいねえ、やろうぜやろうぜ。
浩介 ほら、レンガ倉庫の二階ならやれんじゃん？
勝 あ、いいねえ。
優子 あんた達も出る？
勝 お、いいぜ！出る出る。
浩介 俺も！俺、じいさんの役やるわ。ヤクザ。
勝 お、いいっすね。

河村組の男達も口々に「出る出る」と手を挙げる。

優子 (笑) 馬鹿、冗談よ、冗談。
浩介 貴子も出るよ。
貴子 は？いやよ、何言ってるのよ。
勝 優子姉ちゃんも出てさ、みんなでやろうぜ。
優子 私は無理よ、書くだけ。
浩介 やろうぜ、
優子 やだやだやだやだ、絶対できない。声だけ出るわ、声だけ。女将さんとか。

浩介　なんだよ、ちよつとやる気じゃん。
嘘。冗談。絶対やだ。

勝　あそこなんかいいじゃん。
なによ。

勝　男に二股かけられる姉妹のシーン。リアル姉妹喧嘩でさ。
貴子　え？なにになに？

優子　いや、なんでもない。勝あんた馬鹿じゃないの、何言ってるのよ。

優子は勝をどつく。

勝　いてっ！

更に、何度も勝をどつく優子。

勝　姉ちゃん、痛いって！
優子　うるさい！

勝を追い回す優子。痛い痛い逃げ回る勝。その姿は、まるでじゃれ合っているように見える。それは、幼い頃の姉弟の姿……。皆笑って見ている。貴子もその姿を見て思わず微笑む。やがて落ち着き、勝が貴子に話しかける。

勝　貴子姉ちゃん、俺さ……。
貴子　ん？

勝　働き口、見つかったさ。

貴子　えー、ホントに？

勝　うん。

浩介　どこ？

勝　ほら、歴史民俗資料館、そのの。

貴子　あー、元警察署？

勝　そうそう。今管理してる人が引退するんだって。それで新しい人探してたの。

勝　管理人になるの？

勝　そう。本庄の歴史の管理人。

勝は誇らしげだ。皆嬉しそう。

貴子 良かったじゃない。

勝 (優子に向き直り) だから優子姉ちゃんさ、
優子 ん？

勝 俺達は、多分この町にずっといるからさ、

優子 ……。

勝 だから、たまには帰っておいでよ。

優子 ……。

勝 故郷なんだから、姉ちゃんの。

浩介 おう、そうだよ。

優子 ……。

優子、即答できず貴子を見る。視線が合う姉妹。

貴子 ……。

貴子、やがて、小さく頷く。それを見た優子もやがて、

優子 ……うん。(と頷いた)

娘たちの姿を見ていた喜一郎がその場にしゃがみ込んでいく。

勝 ……親父？

喜一郎は地面に横たわり、更地になった地面に耳をつけていく。

勝 親父。

喜一郎 ほら、聞こえるぞ。

貴子 お父さん。

喜一郎 一人の声が、聞こえるぞ。

皆 ……。

喜一郎 ほら、聞いてみる、お前らも。

皆 ……。

喜一郎 聞いてみるって。

皆 どうしていいか分からず立っている。

やがて優子とその場にゆっくり横たわり、地面に耳をつける。

勝 姉ちゃん。

喜一郎 どうだ優子、聞こえるだろう。

優子 ……うん……聞こえる。

喜一郎、起き上がり、勝と貴子の方を向く。

喜一郎 ほら、お前らも、やってみろって。

戸惑っていた勝と貴子だが、やがて地面に横たわり、耳をつける。

勝 ……。

貴子 ……。

喜一郎 どうだ？聞こえるだろう？

勝 ……ああ……聞こえるよ。

貴子 うん……聞こえる。

それを見た浩介も横たわり、地面に耳をつける。

喜一郎 どうだ？

浩介 ……はい。

喜一郎、河村建設の男達の方に向き直り、

喜一郎 ほら、お前らも。

河村建設の男達も戸惑いながら、地面に耳をつけていく。

喜一郎も再び横たわり、地面に耳をつける。

喜一郎 聞こえるだろう。生きてる人間達の声が。

全員、地面に耳をつけている……。

喜一郎 聞こえるだろう。自由の為に戦った人間達の声が。

全員、地面に耳をつけている……。

喜一郎 お前ら、本当に生きてるって言えるか。

全員、地面に耳をつけている……。

喜一郎 お前ら、今、生きてるって、言えるか。

全員、地面に耳をつけている……。

夕日が、大地に横たわる人たちを優しく包んでいる。

その姿は、大地の声を聞こうとする人間達の姿であり、大地から産まれる胎児の姿であり、大地に死んでいく死者の群れにも見える。

ゆっくりと、ゆっくりと、夕日は沈んでいく。

やがて……暗転。

二〇一八年九月二一日、脱稿

〈参考資料〉

『本庄事件 ペン偽らず』 朝日新聞浦和支局同人

『メディアは何を報道したか』 奥武則